
それいけ魔王さま！

fuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それいけ魔王さま！

【Nコード】

N6468T

【作者名】

fuki

【あらすじ】

気がついたら魔界にいた私。

紆余曲折あつて魔王さま家業をすることになりました。

うん、ただであれだね、RPGでいうと

魔王さまって勇者にやられちゃうよね。うん。

……え、ちよつと待て。

ちよ、私いますぐ帰らせていただきます！！白旗どこだ！

ヘタレに魔王なんて務まるかってんだよおお！！

白旗振りつつ異世界へトリップしちゃった平凡で不憫な子が周りに勘違いされつつ魔王死亡EDに向けてフラグ回避に奮闘するお話。

なお、最初はフラグ回避より寧ろ元世界に帰りたくてうじうじツンツン、恨んで呪って元世界を思い出して落ち込んでという感じの暗めかつシビアかつギャグな感じになっております。

勇者だと？よし、いますぐ降参しよう。

RPGやら小説やら俗に言う異世界トリップでは、異世界トリップという喜劇を体験した者の視点で話が進み、いわゆるそれが主人公に据えられる。

この概念から考えれば異世界トリップを果たした私は主人公ということである。まじ死ね。あいつら消える。

そして、概して主人公というのは平凡から非凡な力を手にいれ美形な従者といちゃこらし、逆ハーやらハーレムを形成しつつ世界の平和を救うとかなんとかの使命を負っていたりする。

それで悪の大魔王を「なんちゃらソード！これで終わりだ！！」などと叫びながら最後の一撃を喰らわせ、従者または国のお姫さまと結婚してハッピーエンドを迎えるのが一般的だ。

異世界トリップなら旅を終えろよ、つかあれか結婚が旅の終わりなのか。それなら異世界トリップじゃなくて異世界セトルメントにしろよ。旅じゃなくて定住だろこんチクショー。

とまあ、こうして取り敢えず長々と語ってみたが私が言いたいのただひとつである。

「なんで勇者じゃなくて魔王なのオオオオ！！！！」

「それいけ魔王さま！」

「魔王さま、お静かに執務をこなしてください。」

現実と理想のギャップに向き合って絶望を感じた私――いわゆる魔王さまなのだが――に側近中の側近かつ政務官の銀が口調は穏やかにけれど魔物のキメラを気絶させそうくらい鋭い視線をとばしてきた。

まじ、こわい。けども、いい加減この理不尽な状況に鬱憤が溜まっているのだ。というか、元の世界で普通に生きていた女にこんなことをさせるのが可笑しいのである。銀死ね。

細かい所に至るまで紋様が施されている贅を尽くし切った職人GJと声高に叫びなくなる椅子の上に足をのせ、体を縮めて天井を仰いだ。

「ねー、いつも思ってたけどさあ、あのシャンデリア絶対危ないって。地震とかで落ちたらどーすんの」

「地震が起きる時は、魔神さまか天神の力が暴走したときだけです」

高い所に吊り下げられているシャンデリアからつまらない奴だなあ――と胡散臭気に顔を歪ませ銀へと視線を滑らした。あいかわらず銀の手は黒い羽ペンを積み上げられた用紙の文をおって動き回っている。

「それって世界の終わりじゃん。」

「ええですからそんな非生産的なことに魔王さまの熱量を使わず早く手を動かしてください」

めげずに話を続け、仕事から逃れようとしたが失敗に終わり、私は肺の中の空気を思い切り吐き出した。

銀は私を一瞥することすらせずに用紙と向き合っている。かつたる！。

背もたれに持たれながら改めて見なれている部屋を見渡した。

まず、この部屋は魔王としてやらなければならない書類の類いの仕事をやる執務室である。

元の世界でいう教室二個分の広さがあり、足下は真つ赤なふわふわな絨毯で埋め尽くされている。扉の近くには皮張りの黒いソファーが二つ向き合うように設置されており、それらの間に重厚な四角い机が存在を主張していた。

これらを通り越して数メートルの所に私の執務机がある。

ちなみに銀は私の執務机を挟むように整列されている右手の机を陣取っている。左手にある机は今ひとつりとしているが、もちろん所有者はいる。

その机から視線をあげ、目の前に落とすと叩き売りにあつたような

山盛りの用紙用紙用紙と対面を果たす。思わず脳内で用紙が、

久しぶりだな、魔王さま！

早くしないとまた同胞が会いにきちゃうぜ！

とくつちゃべりだした。憎たらしい。激しく憎たらしい。というか仕事きつちりしちゃう魔物役人たちが妬ましい……！！親の仇とでもいうように恨みがましく用紙を睨めつけながらも、羽ペンを手にとりインクに先を浸した瞬間に、大きな音で扉が叩かれた。

ハッと顔をあげると、銀も扉の方を見ていたのが視線にチラついた。

「魔王さま、火急の知らせがございます」

扉越しにくぐもった声が聞こえ、椅子から足を下ろした。銀と私の視線が交錯する。

ああ、はいはい分かってるっての。

そう呟いて私は横に置いておいたボールが付いているかぶり物を頭に深くかぶり顔全体が分からないようにした。

なぜなら私は『魔王』であるが、当然のことながら元の世界から今までも『人間』である。ただの『人間』が『魔王』をしているなんて知られたら即刻内界で反乱でも起きそうな気がしてならない。

（ああ、あと女ってのもばれたら終わりだね。）

「……どうぞお入りください」

銀が扉に向かって是の意を表明すると、失礼しますという声と共に耳がとんがっている兵士が執務室に踏み込んできた。はてさて、一体どんな面倒ごとだろうか。

ちなみにこういうパターンで多いのは日頃噴出している問題の中でも上位にたつものである。

たとえば部下同士が決闘を始めて周りを巻き込んだとか、配下の竜が中界に行っちゃったとか、六大悪魔のどれかが頭がとち狂った、とか。ちなみに、六大悪魔は基本いつもとち狂ってるようにしか思えないのは私だけだろうか。

ちなみに私、魔王は本意ながらも魔界を統べる絶対的な君臨者だが基本そういう問題には介入しない方針をとっており、代わりの者に処理させている。

机に行儀悪く肘を尽きながら半眼で兵士を見るが次の瞬間、眼にも付かない早さで椅子から飛び上がった。

「ご報告いたします。中界にて勇者を名乗る一団が不思議な剣を用い六大悪魔のトレイターさまを手にかかけました！」

「……銀、今からありったけの白い布をかきあつめてこい！さっ

さとでかい白旗つくるぞ!!!」

勇者だと？

よし、いますぐ降参しよう。

どこの世界に勇者に勝つ魔王がいるんだよ！

まず、めったんめったんにしてぎったんぎったんにしたいこの世界の説明をしましょう。

この世界は、天使が根をおろしている外界、人間が生活している中界、そして私がいる魔物の住処の内界の三つに分られている。まあ、簡単にいえば天界、人間界、魔界みたいなものだ。

そして三界は独立保全の為に互いの界域に侵入することを私が魔王さまになる前から強硬規範として禁止原則になっていた。むろん、私も銀から契約維持の是非を問う意思表示要求されたとき、それに異義を唱えることなく首を縦にふった。

つか、あたりまえだろバカかお前。嫌だ！なんていうと思ったのかこの銀野郎めが。平和主義者なめてんじゃねえぞ。と罵倒した。もちろん心の中で。顔にはおくびにもださない怖いから。

まあまあ、それでなのだが、最近になって六大悪魔のトレイターが殺られたそうである。しかも勇者に！！ここは素直に魔王らしく、
・・・・夜逃げの準備をしよう。

あつ、白旗作ってねえ！

くそれいけ魔王さま！く

魔王さまこと私は、下士官を部屋から追い出し、机に頭をつけながら盛大な溜息をついた。

ベール越しに見える赤い絨毯をぼんやりと把握して考察した。

えーっとまずは勇者が、現れただと？ふざけるなよ？RPGの王道知ってる？結局べらぼうにレベルアップしちゃってる勇者に魔王って倒されんだよ！！それで世界は救われた・・・。エンディングロール、以下スタッフ名。とかなっちゃうんだよ！！

「ねえ銀ツ、私なんかした！？なあんもしてないよねええええ！？超うっぜええええ！！！！」

「私の耳に酷くストレスを与えるのでお気をお静めください魔王さま」

ダイナマイトが爆発する勢いで恨み辛みを捻りこませた呪詛を受けた銀に、華麗にひらりと回避され、言葉でカウンターパンチを食らわされた。ちなみに銀は用紙にまた羽ペンを滑らしている。

私は口を尖らせながらそっぽを向いて今朝のご飯をも吐き出しそんな深い溜息を吐いた。じゃないと今すぐ机を卓袱台のように引っ繰り返して逃げ出す。

それを銀の目の前でするわけにはいかない。怖いから。

この世界に召還された時は、散々逃げたそうとしてたなあ……。くっそ、なぜ銀が政務官かつ先導警士なんだ。クソ食らえて何度叫んだことか。

ハハハと、遠い目をして過去を思い出し、すい、と横にずらした窓から見える景色は相変わらず鬱蒼とした闇が広がっており、なかなか顔を覗かせない月にまた鬱々とした気分になった。

重々しい空気を霧散させようと頭をふって羽ペンを手にとった。用紙に目を通す。これは、前年度の内界における各地域の支出入の資料だ。

くっそ、めんどくさいな！なんで仕事してんだ六大州総督の連中。机の引き出しの中から内界地図を引っ張りだし机に叩きつけると銀がようやく用紙から顔をあげ私を見た。

なんだよ！喧嘩売ってんのか！受けてたつぞ銀髪！？

スチャとファイティングポーズをとって銀をボコボコにする。
……もちろん脳内で。

「今細部に至るまで調査させております。魔王さまがお気を割く必要はありませんよ」

「でもさあ、まじでセオリーがあんだって。魔王とかラスボスだよ？つまり私がラスボスだよ？バカじゃないの勇者！確実に弱い者イジメじゃん！！」

「確かに魔王さまは稀に見る弱さを誇りますが、何をそんなにも臆していられるのです」

呆れたとでもいうような声音に思わず声を荒げ、被っていたベールを剥いだ。

「だって銀知らないじゃん！どんだけこの世界がファンタジーでRPGチックなのなんて！！魔王に勇者って大分なキーワードだよ！？」

ぶずり、と眉間に濃い皺を寄せるが銀は見る気もないのだろう、彼は用紙を右から左へと黙々と移動させ、とんとんと机の上で一つに纏めあげた。

それに更に苛つくと、がたりと音がし、内界地図からゆるりと右前へと視線を向けると、銀色の髪を揺らしながら銀がこちらに背を向けていた。彼のつま先は扉の方へ向いている。

「今から各自自治州総督を招集します。日にちが変わる頃には対策会議が催されるのでご了承下さい」

そうしてパタンと音をたてて無情にも扉は閉められた。

対策って言ってもな！

どこの世界に勇者に勝つ魔王がいるんだよ！

よし、今すぐ譲ろう魔王の座。

今魔王さまこと私は、とある侍女の詰所の一部の部屋で侍女が白い布を裁断している様子を眺めていた。下士官ちゃんと命令に従ってくれたんだね。と半ば感心した。

ああ、あの布の白さが眩しくて直視できない！！なんて輝いているの！！早く白旗ができるのを期待しているよナイスバディーな耳長魔物侍女さんッ。

私は侍女がちくりちくりと布を通し、少しずつ動かしていく手元を眼でおっていた。完成が近付くにつれて勇者に向かつて大漁旗の如く白旗を振り回し、勇者と戦わずに済むかもしれない未来が胸によぎった。

ふふふ、と口元が緩い弧を描く。

そんな様子を侍女は偶然にも眼に止め、凍り付いたように手を止めた。

ちよ、こらあとちよっとじゃん頑張つてよ！！

きゅ、と拳を握り、応援の気持ちを込めて『魔王』として男らしい声を意識しながら侍女に声をかけた。

「あと少しだ」

声をかけられた侍女は瞠目して肩を震わせた。

あげていた顔をハツとして布に向け、縫うのを続けようとしているのだろうが、震えが止まらないことによって針を持つ手が覚束なくなってしまうていた。小首を傾げ、収まるのを待ったが中々震えが止まる気配がなく、体調が悪くなったのだろうかと思った。

人ならぬ誰か魔物を呼ぼうといきつき、立ち上がった拍子に哭いた椅子の音に侍女がまた体を縮こませた為、眉をハの字に下げた。

白旗作ると魔物って体調悪くなんのかな？クソクソ勇者め！この元凶があー！！

とりあえず顔を伺おうと顔を近づけた所で、バツターンと煩い音をたてて詰所の扉が開き、私とその侵入者の眼があった。魔女のような黒いとんがり帽子をかぶっている侵入者は啞然したような顔をしていたが、瞬きした瞬間にまりと笑った。

「いやーん、お邪魔しちゃってゴ・メ・ン・な・さ・い！あたしも入れていちゃいちゃします？」

竹箒を持った侵入者は、眼の側で横ピースをし可愛いウインクをとばしてきた。

「それいけ魔王さまー！」

先程の侵入者は強いていえば知り合いだった。ちなみに彼女はこの魔王城で掃除婦をしている魔女である。

トレードマークは黒いトンがり帽子に掃除に使う竹箒である。時折竹箒がデッキブラシにかわったりするのだが。紫色の髪を持つから名前は紫など酷く単純だなと思ったが銀もそうだな、と思った。

ちなみにRPG方式でいくなら、銀は俗にいう悪魔召喚士であり紫は敵魔女である。ほら、戦闘シーンで攻撃対象の頭上に『シルバー』と表示が出るあれである。あとあれだな、兵士1、兵士2、兵士3みたいな？

というかターン毎に攻撃するとかあるかな・・・あれば良いな・・・。私だったらそんなターン待たずに攻撃するよ！！あ、嘘ついた！！即逃げるよ！！

「魔王さま、会議室へ御足労お願い致します」

ガッテム！と両手を天に向け体を仰け反らせていたが銀は華麗にスルーした。

今私がいるのは広い会議室である。

部屋の両壁にはアーチ状の窓が連なっており、それは月の光を透過させ視界の明度をあげている。凜とした月の光を浴び、不気味に輝くベールから見えた口が大義そうに開く。

「トレイターが死んだ」

しん、と低い声が張り詰めた空気をゆらし、部屋を静かに響かせた。

ざわつきがないということは、やはり皆知っていたのだろう。中央に配された縦長の重厚な机の両端に少しの空席が見られるが、ほぼ埋められた内界を牛耳る重鎮や代行者は無言を貫き静かに魔王である私の言葉の続きを待った。

「銀」

そう呟くと左手に座っていた銀が頷き立ち上がる。

「まずは概要と経過をお知らせしましょう。先日真夜中トレイターが中界で勇者を名乗る人間に殺されました」

銀が説明する内容を事前に知っているため、私はを右から左へと流しつつ心中で愚痴りまくっていた。

もうまじ勇者怖ええ！鬼畜じゃね！ハンパなくね！別に殺さなくても良いじゃん！トレイターが、おいたしちゃってたなら止めさせるい、って内界に書状でもなんでも送れよ！？争い事の火種だったら喜々として解決させるわコラ！！

「勇者は不可思議な剣を使い黒魔法を相殺させたそうです。士官によれば、今勇者率いる一団は中界のヤパンジ国の北東部ツカイトウホを拠点にしているようです」

「・・・ほらあ、きたぜ？」

私は予想通りの展開に嘲笑を浮かべた。

はは、勇者もう不可思議な剣とやら持つてんぞ。てか、チートの武器がなんでいつも勇者の周りに集まんの。魔王にだってあつて良いじゃん、差別か！？つかあれだよ、勇者と魔王じゃ絶対資金的な面でも強い武器とか手に入りやすいの魔王だろ！

「とどのつまり、我々が議論せねばならないのは空席の大悪魔後任問題と、その勇者一団をどうするかです。まずは、後任問題を議題とします」

銀は仕事は終わったとでも示すように静かに椅子に座り、私に先を促した。

あー、はいはいはい。分かってるって。低い声、低い声と。

「以下より発言を認める」

「はいはい！銀くんに質問！トレイターの羽持ちはどうなったの？」

蜂蜜のようなとりとした金色の髪の少女とみまごう可憐な少年が机に乗り出すようにして幼子らしく元気に手をあげると、周りの重鎮や代行者が少年を尊敬の眼差しで見つめた。

ちなみに羽持ちとは、その背に羽を持つもののことを言い、彼らは総じて上位階級者の地位を取得している。

「いえ。生き残りはいるらしいですが、嘆かわしいことに羽持ちは流石に姿は見えずですね」

「ふうん。じゃあ他から採んなきゃじゃん」

「まだ決まっていらないだろうがチビガキ」

「라이어だってオッサン！」

急に割って入ったあげくチビガキ呼ばわりされ少年라이어は頬をぶくーっと膨らませた。

「俺はアイドルライターだっつの」

ライアーのはすむかに座っている髭面の男が、少し笑ってから私へと視線を向けた。

「お久しぶりです魔王さま。議題に反る発言をしたことをお許し下さい」

「ああ」

私はベールで隠されていることを良いことに顔を歪めた。

六大悪魔のライアーとアイドルライターとは関わりたくない。ライアーは可憐に見えるが目玉が飛び出る位に狡猾だし、アイドルライターは目玉が破裂するくらい『魔王さま』崇拝者だからである。

ほら見てあの眼のキラキラさ。ヤバくね？まじ崇拝されるたびにありえないくらいダメダメなネガティブ方向に非凡さを発揮している自分自身の首をしめなくなる。しめないが。

二人の発言を契機に議題が進んでいった。

それから数時間後にもたれた小休憩で、ことんと置かれた皿に添えられたバターたっぷりな濃厚クッキーを私は口いっぱい詰めた。

「お疲れ様です魔王さま」

銀に注いで貰った紅茶のカップの取手に人差し指をひっかけて一度に呷ると、爽やかな香りが鼻孔を通り過ぎていく。ホッと一息つけた所でまた重々しい扉を叩く音がし、許可を出すと士官が恭しく魔王専用の控え室に入室した。

「魔王さま、銀さま。勇者の目的が分かりました。勇者はどうやら愚かにも魔王さまの御命を狙っておられるようです」

「・・・・・・・・」

落ち着いて報告する士官に、思わずクツキーを投げつけた。

よし、今すぐ譲ろう魔王の座。

ザ・勘違い そのいち

よく分からないが急に出了た魔王さまの勅令、王令に従って侍女こと私は何時も通りの詰所の一部の部屋で白い布を繕っていた。いつもは穏やかな詰所なのだが、ぴんと張り詰めた空気が広がっている。

じわりと針を持つ手が汗に濡れ親指が滑った。

廊下を通る靴音なんていつもは気にしない筈なのだが、今日ばかりは嫌に耳につく。

胸を迫り上がってくる気持ち悪さを振り払うようにちくちくと針を持つ手を動かしていたその時だった。

御前にいらっしゃる魔王さまが、ゆるりと、嗤わ、れ、――

瞳が大きく見開いた。

ぞわりと背筋を這った悪寒に全身を絡め取られ、きゅ、と喉がつまり息が吸えなくなる。すらりと顔をあげる魔王さまに視界が急激に狭まり、私の世界の彩りが黒く染められた。

艶やかな黒髪が、肩を滑るその一本さえ見逃さぬといわんばかりに瞳が魔王さまのみを捉えその一動一静に全神経を集中させる。ひさしく感じていなかったが、これは、この感情は、

「あと少しだ。」

——まさしく、純粋な恐怖。

耳朵をしとりと染める言霊に身体がさらに震え出す。

一度思い出してしまった感情にさらに私の「何か」が呑み込まれるのを感じ鋭歯を噛み締めようとするが、かちかちと耳障りに音を奏でるだけであつた。震えた身体を守るように縮こまると

かたり、と椅子から立ち上がる音。

近づいてくる怖ろしいまでの、身の毛がよだつ、底の見えない延々と続く闇の源。

——・・・どろりとした、死の気配。

（誰か、誰か、だれかつ・・・！！）

眦に浮かんだ涙が頬を滑ろうとした瞬間に聞こえてきた軽やかな声音。

「いやーん、お邪魔しちゃってゴ・メ・ン・な・さ・い！あたしも入れていちゃいちゃします？」

くそれいけ魔王さま！ 他人視点く

俺は内界を牛耳る某総督の代行者として、魔王さまがおられる城でおこなわれる会議に参加している者だ。ま、いわゆる上級官職者つてことだな。

ちなみに今、俺はその会議が行われている会議室にいる。一番奥にいらっしやる御方へと視線をゆつくりと向け、息を呑んだ。

窓から零れる月の光が魔王さまを照らし、そこだけが、この世界から弾かれているのではないかと錯覚するほどに神々しさを俺に刷り込ませる。

遠目で魔王さまを見たことはあったが、これほどまでに近くで垣間見たことがなかった俺は胸を静かに震わせた。この己を畏怖させる神聖さを持つ者が、魔の王であり、俺達を統べる御方。

「トレイターが死んだ」

しん、と低い声が張り詰めた空気をゆらし、部屋を静かに響かせた。その高くもなければ低くもない声音は、俺を少なからず威圧した。いや、この場にいる者の全てが魔王さまの御声に威圧されたに違いない。

魔王さまの側近である銀が頷き立ち上がり、ことのしだいを述べる。

「まずは概要と経過をお知らせしましょう。先日真夜中トレイターが中界で勇者を名乗る人間に殺されました。勇者は不可思議な剣を使い黒魔法を相殺させたそうです。士官によれば、今勇者率いる一団は中界のヤパンジ国の北東部ツカイトウホを拠点にしているようです。」

その時だ、その時、魔王さまの纏う空気が変わった。

魔王さまに不躰ながらも視線を向けた先で見た、うつすらと、艶美

な嗤いを作る端正な口元。

（思わず息を止めてしまう俺は、どうしようもなく弱い、のだろう）
だがしかし、この空気は。なんという怒り、なんという憤懣。

——・・・なんという、闇の気配・・・！！

どくん、と心臓が跳ねた音が耳元でした。

この時、俺は悟ったのだ。

魔王さまがこの場に入られた瞬間から己の命は魔王さまの掌の上にあるということ。

生殺与奪は全て魔王さまの掌の上に。

圧倒的な魔王さまの闇に魅せられた俺は、こうして今日をもってして全身全霊をこめてお遣いさせて頂こうと初めて心の底から思ったのである。

（ザ・勘違い。）

さてと、逃げようか。

RPGの勇者周辺の大まかな流れは

勇者が仲間ないしはパーティをくんで

様々な挫折や立ちはだかる敵の屍を乗り越えて

ラスボスのもとへと辿り着きラスボスを倒して終わる。

まあその後の諸々は前言った通りである。

というかね、ラスボス戦の前にHPとかMPとか

全回復させるとかずるいと思うんだけどな。

なに回復しちゃってんだよこのヤロー。

つかね、うん、普通ラスボス戦の直前にセーブポイントみたいなのが

RPGなら結構あるけどさ、ねえ？

でも実際だったらありえなくね？

ラスボスだってそんな親切なわけじゃないよ？

親切心からセーブポイントおいちゃうとかどんだけラスボスが

広い心で慈愛深いっていう話になっちゃうでしょ。

というわけでこの世界の理不尽によってラスボスな

一応魔王さまこと私はセーブポイントなんて優しいものはおきませ

ん。

つつか事実、セーブポイントって何？なんであんなもんあんの。

・・・あ、ゲームプレイヤーの時間に配慮するためか。

くそれいけ魔王さま！く

勇者が現れたと聞き、さらに魔王様の命を狙ってるんだぜ！
っていう冗談にもほどがある事実を告げられた後、魔王こと私は
自室のキングサイズベットの横で皮の鞆の紐をキツく縛った。
歪な蝶々が出来上がる。よし、あとは逃げるだけだ。

ごくりとツバを吞み込み、薄暗い光を差し込ませている窓へと視線
をあげた。

そうそう、「なぜ勇者が現れたと聞き以下略」を「トレイターが死
んだ後」と

言わないのは勿論私の中で勇者が私に与える恐怖が悲しみよりも大
きいからである。

てか別に六大悪魔のトレイターが死んだからって言われても正直あ
っそつて感じた。

直接話をしたのなんて一言しかないし。私に被害がこなけりやそれ
でよい、うん。

そう心中で呟きながら、ベットメイキングされた皺もよっていない
上品な赤黒いシーツの上に白い封筒をおく。

まあ、これはなんつつか、一つの保険みたいなものだ。銀にバレた
時用みたいな。

上手く逃げ切れたら万々歳、途中で見つかったらさようなら、であ
る。

ゆっくりと立ち上がり前を向いた魔王の意志を孕む瞳を隠すように
ベールが夜の帳がごとくゆれた。

こっそりひっそりと鞆をひっさげつつマントの前を留めて部屋から足を踏み出し廊下を歩いていった。

時折すれ違う魔物たちに内心どきどきするが、ここはやはり魔王さまというためか

誰も声をかけずに、ただ頭をさげ私が通り過ぎるのを待っていただけである。

いける、これはいける！！ようやく魔王さま業から足を洗える！！小さくガッツポーズをし、にやりと口角をあげつつ綺麗に磨かれた大理石をブーツで蹴り上げながら進む。

くり抜かれたアーチ状の窓からは宵闇が広がり、蝋燭が唯一仄かな光を生み出していた。

一人、二人と城勤めの魔物や侍女たちとすれ違う。

向かう先はこの城の庭である。ちなみにこの庭には思い出が沢山まつている。

昔、ここへとトリップし魔王として即位させられるにあたり

銀達による過激な指導の合間をぬって、

自分がいた世界に思いを馳せ泣きまくったなあ・・・。

当時を思い出し目元に熱さが込み上げたが気がつかないふりをする。そして、魔王は突き当たりの角を左へ曲がり高大な庭へと出た。

庭は煉瓦や小石が敷き詰められていたり、青々とした芝生で覆われている。

よつと、と段差を飛び越え庭へと続くゴスロリ風のアーチをくぐる
と、ふいに躰が噓せ返るような甘い香りに包まれた。

鼻から脳へ突き抜けるような匂いに、一瞬、目の前が暗くなったが
足を一步踏み出し目眩から逃れるように手で瞳を覆った。

「……………きつつ。」

目眩に気を取られ、思わず地声で罵りを零し、マズイと思って顔を
上げたが、

ありがたいことに周囲に魔物の姿はなく、ほっと息をついたのだが、
がさりと深々としていた草むらがゆれ、思わずやばいと身構えた。
内心だつらだつたのである。

なんだ、誰だ誰なんだ？最近になって大分魔物たちに慣れてきたが
それでも人間と異なる形相にびびってしまう。

まあ、魔物の中には正直人間よりも美人が多い。

銀曰く、魔物の生存本能がさらに貪欲になった過程においての産物
であるらしい。

確かに、顔がよけりやあ人間なんてコロリだろうよ。

あああ、魔王さま搜索班じゃなけりやあいいなあ……。

そんなことを逃避しながら思っていると、ふと薔薇の葉をはんでい
る虫を見つけた。

音がした草むらは何の変化もなく、ほっとしたのか心根が素直に出
た。

「・・・虫か。」

よくよくその虫を見てみると、内界の虫らしく、うねうねとした紫色の軀に赤い斑点がちりばめられていた。

気持ち悪い、はてしなく気持ち悪い。

おぞぞぞと肌がとりたち、身の毛のよだつ身体を抱きすくめた。

この薔薇園だけで一体何匹の虫がいるんだ!?

・・・時々魔女っ子紫が飾ってくれる薔薇ってこの、だよねえ?

視線を滑らせて茂みを注視するとやはりそこかしこにいる。

・・・虫は虫でも互恵関係だったらあれだけど、やっぱり

「害虫は処理しなくてはなるまい。」

じいつと見ていた虫がによきによきと動きだし生理的嫌悪感から視線を外し顔をあげた。この虫達きつと、侍女さんとか魔物庭師に見つかったら殺虫剤まかれるんだろうなあ。

「一体いつまで生きていられるだろうな・・・?」

まあ、私もそれにあてはまるんだろうけど。とりあえず、さっさと

逃げよう。

ふ、と思わず諦めの笑みを浮かべるともう一度がさりと草むら人が
知れず揺れ、

その場から1つの気配が消え失せた。

(さあてと、逃げようか。
(

ザ・勘違い そのに

最近、^{ないかい}内界の悪魔や魔物たちが僕がいる世界、
まあつまり中界^{ちゅうかい}なんですけれど、で、気が触れたとしか言いようがないくらいに人を食すようになりました。

これほど大きな規模では過去の歴史として伝えられている大戦以降おこなわれてはいませんでしたから
事を重大と見たらしい「上」が僕の機関に依頼をしたんです。

今までそんなに出たことはないんですけどねえ。
ああ、そうそう、僕は「とある機関」の長、
『かしらだつもの』とでも言っておきましょうか。

くそれいけ魔王様ーく

『とある機関』の『かしらだつもの』は、機関の者のみが扱える内
界へと繋がる道を使つて、今まさに内界へ赴いていた。
眼前に広がる混沌とした景色に怯むことなく、むしろそれを逆手に
とつて闇に融け込んでいる。

一般的な人間であつたらこの闇に呑み込まれても可笑しくなかつた
が、彼は常々部下から言われているように殊更一般的という領域か
らほど遠い場所にいたため悠々と気配を絶ちながら足を進めていた。
久々の内界だが、昔より大分治安も良さそうな光景以外、特に悪魔
や魔物たちの変化も見られない。

そんな長閑と言つても良いくらいの町並みを抜けた。

「（あつさりと入れましたねえ……。）」

崖を望む大きな城の中に軽々と侵入できた彼は、久々に己の力量を
はかれる最早千載一遇の機会だったのにと若干気落ちしたような溜
息をついたが、

今度から己ではなく幹部に行かせれば良いことかと考え直し、壁を

よじ登った先にあつた庭で身を潜めていた。

魔王が住む城であるから警備網は完璧だろうと思つていたのにあまりに軽々と侵入でき、所詮こんなものか、と興ざめしうーんと伸びをした。

内界の雰囲気は大して彼にダメージも与えなかったが流石にこの噎せ返り吐き出したくなるような薔薇の甘つたるい臭いだけは精神的に彼を蝕んだ。

無臭な彼にとってこの臭いはただの毒としかならない。

とはいえ眉を顰めただけに終わらせ、さつさと事を終わらせようと欠伸をもらした。

警戒することもなくあまりに普段と変わらない様子であるが、そもそも『かしらだつもの』の彼は警戒なぞ必要なく全ては己の技量のみにて大凡事足りていた。

——だからこそ彼は困惑したのだ

かつん、かつん、と軽い煉瓦を叩く小さな靴音を敏い耳が拾い上げ彼はゆっくりと俯いていた顔をあげた。

音の位置と気配から己との距離を冷静に弾き出す。

薔薇の影に隠れるようにして、僅かな草の間から幾分白けた眼をこらしていると、その音のもとをあえなく捉えた。

「（・・・これはこれは）」

今回、ここへ潜入した理由は、魔物の活発化に恐れを成した「上」から内界、特に魔王の様子を見てくるように言われたからだ。足音を顰めることもせず、とはいえ彼は足音などさせぬのだが、隠れながら近づいていく。

「——・・・きつつ」

ふと届いた高い声に、おや、と眉を跳ねさせた。

「（おんな・・・？）」

ハッと顔をあげたその者の顔にはベールがかかって伺うことはできない。とはいえ声からして女に間違いはないだろう。

なんだ、噂の魔王じゃないんですねえ、と興味を失ったが、かざりとふいに吹いた風が草むらを揺らした瞬間からそれはすぐに興味へとかわり、また違う感情に呑み込まれた。

「・・・虫か」

低くもなく高くもない静かな声が空気を震わせた。女とも男ともとれぬ中性的な声音。

ただ一言の「虫か」という言葉。たったその一言でこの庭園にピンとした糸が張り巡らされた。先ほどとは真逆の苦しさ。

「害虫は処理しなくてはなるまい」

ベールで遮られた瞳は間違いなくこちらへと向けられている。それは「気づいているかもしれない」という可能性だった。だが、可能性の域を出なかったそれは呆気なく頭を出した。

（・・・やはりこちらに、気がついている・・・っ？）

ぞわりと久しく肌が粟立った。遠い昔に経験したのみのそれは彼の琴線に無遠慮に触れたが、あれから溢れ出す心当たりのある親しいそれに、うつすらと『かしらだつもの』は猛禽類のような酷薄な笑みを浮かべた。

研磨され鋭く突き刺さるような、けれど月の下の湖面が如く静かな冷たい殺気。こちらを本能的に震わせる殺意。

ゆるりと、彼は眼を細め赤い舌で渴いた唇を舐めた。

「（おやまあ。僕の早合点でしたね。こんな面白いのが此所にいただなんて。）」

彼には自負があつた。

声から感情、反射、痛覚、本能に至るまでおよそ自分の全てを己が意思で操ることができる。

そしてこの世において己は恐怖の対象であり恐懼しうる者ではないという揺るがぬ自負が。

——だが、それをも見抜き嘲笑うような言葉にぴくりと身体が震えた。

「一体いつまで生きていられるだろうな・・・？」

ベールから覗く禍々しいまでの歪められた口角。いつでもお前如きの命など刈り取れる。見栄や意地ではなくただ純粹な余裕を彼は感じ取った。

相手に動く気配はない。ここは見逃してやると言うわけか。

「（・・・・・・・・・・これまで、ですかね。長居は無用です）」

彼女、いや彼が例の『魔王』に違いないだろう。

己の第六感とも呼べる勘も是と判断していることも材料の一つとして、「その」仮定を確信へと昇華させた彼は、自分の矜持をすぐさま捨て去り、風のように姿を消した。

——黒は黒だが、黒であるくせに異彩を放つ闇の黒。
伝えねばならないだろう、ありのままを。

ねえ「上」の連中さん。

「例え僕でも『魔王』を殺すのは流石に骨が折れますねえ。」

よくても相討ちにすらなりやしない。

巻き込まれる前に逃げるが勝ち

ずっと昔、この世界に落とされたときの私。その時のことはまだ覚えていて。目蓋の裏に張り付いて消えないあの光景を私は一生忘れないだろう。たとえ、家族の顔すら忘れたとしても。

異世界の話があるなら聞きたい。異世界の物かもしれないという物があるならば見に行きたい。異世界への異界渡りの方法があるなら藁をも縋る思いで試したい。

帰りたい。この世界のことなんて全部放りだしても。私がいなくなつて、この世界が崩壊を迎えるなんて言われたとしても、そんなちっぽけなことだったら私は満面の笑みを浮かべて帰るだろう。あの光景と共にこの思いは消えることはない。元の世界に、私の世界に帰るために情報を集めたい。

だけど、そんなことを思っても『私』はどこまでいっても『魔王』でしかなかった。

「それいけ魔王さま！」

庭園をこそこそと通り抜けながら、薔薇のアーチをくぐつた。噴水の音がするが、逆方向に歩んでいるために段々水の音は小さくなっていった。奥に奥にと進んで行くとうまく壁がでてきた。私の逃走を阻むような大きな壁。

「・・・邪魔だ」

目の前にそびえる壁は敵の侵入を防ぐためか、空高く伸びている。

壁に手を触れてその高さをまじかで見めるが、遠くから見ても圧迫感がするのにな近寄れば近寄るほど重苦しかった。いくら金かけてんだが……。呆れたように半眼で見上げたが、すぐに頭を振った。壁は、敵の侵入を防ぐだろうが此方の逃げ道も絶つ。だけど、そーいうのも考えられて逃げ道っていうのは確保されてるもんなんだよねえ。鉄壁も、もはや我が手中。ほんのりと笑って誰かに見られる前に壁をまさぐった。

「ふんふん」

舗装された道を軽やかに闊歩する私。ああ、素晴らしい！あのあと、上手い具合に魔王城から抜け出せて、城下街の市場を散策しているのだ。ちなみに、途中の林の中で性別を誤魔化すためのベールをとって鞆の中にしまった。かわりに闇色と呼ばれるこの黒髪を隠すために帽子をかぶる。

闇色は内界のものにとって母であり崇拜の対象なのだ。ちなみに選んだ地味なマントはそのままだ。魔族もマントを着ている傾向があるし。今だけは、魔王でもなんでもないただの女でいられる。

「相変わらず賑やかー」

この市場は中道りで開かれていて道の両端を所狭しと小店がひしめき合っている。お洒落な小物売り、元気な八百屋、ちょっと怪しい雰囲気の仕事屋、狭い店の天井にわんさかと布を垂らした布屋など様々だ。

地面に大きな布をひいて露店を開いている牛頭の魔族もいれば買い物客と店主との駆け引きや声を張り上げる身体は虎である人間と呼

び子の客寄せ、道の端っこで井戸端会議している人間型、混合型のおばちゃん達など様々だった。

ちなみに、このなんちゃら型というのは、元々生まれ持った容姿の場合と、それぞれの魔力によって姿を変えている場合がある。姿を変えるには大きな魔力が必要であるが、魔力を持つものは好んで人間型になるのが多かった。

露店と呼び子は魔獣本来の一部と人間を併せているから混合型。おばちゃんの一人は上から下まで人間にしかみえないから人間型。とはいえ尖った耳はそのままだが。とまあ、こんなものだ。ちなみにこの光景は私の中では種族混合なアラビアンな市場のイメージと似ている。

「これなんだが、あるか？」

「ああ、まだあったよ。ちょっと待ってな」

「まあ！よしてくれよ！褒めたってなんもでないさ」

「そんなこと言っただけであんたも満更じゃないんだろ？」

歩きながら拾った会話など明るくわいわいと賑やかな光景に頬を緩めたところで、鮮やかな香りが鼻を擽った。匂いにつられてきよるきよるしていると、たくさん布地の袋の中に赤や緑、毒かなにかですかと真顔で尋ねなくなる青の香辛料などが顔を覗かせていた。甘いような、でもどこか辛い独特な匂い。近寄って、覗き込むと向かい側からひよっこりとターバンを巻いた女の子が顔をだした。

「ひよわ！びつくりした！！」

「あはは、ごめんね」

人がいるなんて思ってもみなかった女の子は大きな瞳を瞬かせて、にこりと笑った。

「いらっしやいませー。なにか、おさがしですか？」

「あー・・・」

まだ小さいだろうにニコニコと店番をしている女の子を見て、私は口ごもった。不思議な匂いがしたから見てただけーとか、なんか申し訳ないな・・・。しょうがない。

「漢方薬みたいななにか薬になるようなものってある？」

「???お薬？」

「そう、お薬。」

「えっと、ちよつとおまちください」

そう言っておにいちやーんと店の奥に走り去っていく小さな背中を見送って、のんびりと香辛料の類いを眺めようとしたが「ほらあのお姉ちゃん」と先ほどの声がして顔をあげた。隣りにいるのが彼女のお兄さんなんだろう。

「兄ちゃん今日ようやくもぎ取った休みなんだけどなあ」とぼやいてる彼に女の子から視線をずらすとカーキ色のアラジンパンツに淡い色のタンクトップをあわせ、灰色の上着を肩にかけていた紺色の髪・・・、バツと視線を下ろした。

というかむしろ頭ごと下へ向けた。嫌な予感に冷や汗が背中をたれ

る。だだだだつて私、あの人見たことあるぞ？しかも、城の中で見たことあるぞ！えっと、城勤の役人さんだよねー、黒目黒髪かと勘違いしてたから凄く気になってたんだよね！！

だが落ち着け私。今、私は魔王でもないただの人間の女だ！そう、ただの女！よし。一瞬のうちに決心をつけてなんともなさそうに顔をあげる。ただの女、ただの女。

「お待たせしました。薬をお探しと伺ったのですが、どのようなものをご希望ですか？」

「あー、つと。き、緊張を和らげるような・・・」

なに言つてんの私！しどろもどろになりつつ答えたがお兄さんはなんの疑いももたずに乾燥させた葉っぱを見せてきた。軽い説明から判断すると、リラクスティーの茶葉のようだ。周りの香辛料の香りがキツかったが甘い花の匂いがして、迷わず購入した。

ちなみに銅貨で支払った。世の中へそくりつて大事だよね！！袋を受け取ろうと手を伸ばしたが、中々渡されず不思議に思つて顔をあげた。紺色の瞳が訝しげにじつとこちらを見据えている。その瞳の奥で揺らめいている疑惑に、もしかバレたのかと小さく震えた。

口を閉ざしていたお兄さんがこくりと首を傾けたがすぐにハツとして袋を渡してくれたので、ひったくるように受け取りそうになったが、極力自制して受け取った。

「ありがとーございましたー」と眠た気な声で見送られつつ、すたこらさつさと身体を翻して人混みへと紛れ込んだ。だいぶ離れた所まで行つて脇道に入つたところでようやく一息つけて胸に手を当てて長い溜息を吐く。

「びつくりしたー・・・」

あれバレてないよね。なんか最後若干眠たそうだったし。半分寝ながら接客してたのかなあのお兄さん。ふー、ともう一度呼吸を整えて細路地を見渡した。なるほど、ここはレストラン街か。

「っと、すまねえな嬢ちゃん」

「あ、こつちこそすみません」

がたいの良いお兄さんーあ、ワシ頭だーとすれ違いさまぶつかりそうになって慌て左に避けた。上を向いて歩いていたのが悪かったのだろつ。お肉を焼いた食欲を促進する香りにお腹がぐう、と鳴ったので腹ごしらえでもするかーと一歩踏み出したが、肩をがしりとつかまれ飛び上がった。振り返ると紺色の瞳。

「ギャツ！」

「あ、いや、」

不気味な叫びをあげた私に、わたわたと先ほどの香辛料のお兄さんが顔の横で手をあげた。こちらに害意はない！主張のホールドアツプである。なにしに来たんだこの兄さん。まさか、やっぱりバレたの？い、いや、だが今私はただの女！魔王業は退職したの！ただのニートだなんか文句でもあんのか。

背の高い彼をじりと下から睨みつけるが逆にガン見されてそろりと視線をそらした。自分のヘタレ具合が憎たらしい。真顔でガン見とかイジメだろうが。気まずげに足元に視線を向けていたらお兄さ

んがごそごそとポケットをまさぐって手をだした。

「さっきのお釣を渡すの忘れてしまっ」

「・・・あ」

そういえば、さっさとおさらばしたくて品物だけしか貰ってなかった。そろりと受け取るとお兄さんは申し訳なさそうに苦笑いを零していた。

「わざわざすみません・・・」

「謝るのはこっちですよ。ブルー、あ、妹に言われるまで気がつかなくて」

ちよっと恥ずかし気に頭をかくお兄さんのあの小さなターバンの妹さんってブルーていうんだなあ。というかまた色の名前か。そう口走りそうになって慌てて言葉を呑み込んで、ぺこりと頭を下げると慌ててお兄さんもぺこりと頭を下げた

「えっと、本当ありがとうございました、すみません」

「こちらこそ申し訳なかったです」

「えっと、それじゃあ・・・」

「あ、はい、・・・あ、あの！」

もう一度謝罪と謝意を別れの言葉にして身を翻したが、続けて投げかけられた言葉に振り返ろうと思ったその一瞬、ドガガアン！！と

大きな破壊音と共に横からなんかでかいのが吹っ飛んで来た。

「・・・は？」

思わず間拔けた声を零すが、バアンとこちらも大きな音をだして向かい側の壁にぶつかって止まった。砂埃が白く舞う中、ぼろぼろになった木製の扉を下敷にしていた影が揺らめく。すっと人しれず私の背筋がのびた。

こ、これはきつとフラグだ・・・なんかの厄介ごとフラグだ・・・！！関わりとめんどくさいことになんぞ！！怪我とか大丈夫かな、と不安になったことは事実だったが立ち上がった影はぴんぴんとしている。

それならもう思い残すことはここにはない。巻き込まれる前に逃げるが勝ちである。パツと細い小道に歩きだして振り替えるな私は黒子、影薄いと言い聞かせてその場を脱した。

「イテテ・・・なアにしてくれちゃってんのよ？」

「うっさいわね魔王さまに突き出すわよ」

微かに聞こえたセリフに私はぶるりと身体を震わせて薄暗い裏路地をマントをはためかせながら走り抜けた。

サングラスと橙色

魔界のイメージはきつと、闇に包まれた中で悪魔や魔物たちは暮らしているという感じだろう。だが内界はそんなことはない。

太陽が出てくるくらい明るい時間帯があるのだ。闇を照らす光って・
・って哑然とする人もいるだろうが、事実なんだもん仕方ない。
まあ、ひたすら夜空は月明りしか零していないけどね。じゃあなんでそんなに明るいのか？と言われたら答えは人工太陽を打ち上げているからだ。

もちろん人間界である中界みたいに太陽が出て沈むというサイクルは短いけれども。いやはや、ほぼ暗闇で蠟燭だけしか光源がない生活に早々と我慢できなくなつてぶちキれたあの頃が懐かしい・・・。
人間、太陽必要よね。

ちなみにあれが初めて『魔王』としての権力を行使した瞬間だっただろう。

くそれいけ魔王さまー！く

人工太陽が打ち上げられているにもかかわらず、この裏路地は暗かった。微かにカビ臭く埃っぽさすら感じる。

むずむずとする鼻に眉間のシワを寄せると、ぶわつくしょんとくしやみがでた。威勢の良いくしゃみだ。我ながら自分に呆れかえった

が、気にせず歩を進め続けた。

最初の頃は路地に座り込んでこちらを見てくる魔物や、酒瓶を煽っている悪魔とかをちらほら見たのに、いまは全く擦れ違いらしい。

・・・あまりの閑散さが逆に不気味である。

ふとざわめきを耳が拾い上げる。

あっちの方向が中道りの市場なのかな？そう思っただけで裏路地を右に曲がったり左に曲がったりしてどうにか近寄って行っただけ、周りは段々暗くなるし、なんだか賑やかで熱気に溢れたざわめきじゃなくて寧ろ人同士が喚き騒いでいるような雰囲気がある。

しかも急に静かになった。しかも、もうほぼ迷子状態だし誰かに道を聞かなきゃなんない。

心の中でぐらぐらんと振れる秤がやつとのことで傾いた。よし。意を結してこそこそと近寄って古ぼけた壁に身を潜め耳をそばたてた。

「たく、うつせえ魔獣どもだ」

「仕方ないとは言え金がないやなー？んで、こいつらさつさと売っ払うか」

ああ、とまた誰かの声がしてざわざわとした物音がし始めた。声音から判断しても結構な魔物がいる。私はあまりに突飛すぎたことが

理解できなくてゆつくりと今の言葉を咀嚼する。

たくさんの魔物。騒ぎ立てるようなざわめき。うるさい魔獣。金。うっぱらう・・・売っ払う、売っ払う!?

嫌な答えに辿り着いて、ひっと息をのんだ。身体がバカみたいに震えてざっと血が下がる。

これ、これ私、もし見つかったら、見つかったらまさか殺される?

ふと、もしもに震える私を遠くからみつめる私に気がついた。自分の命が脅かされる可能性に震える私。ただ、それだけに怯える私。

逃げるように、ふえ、と一歩下がったが背中を誰かに触られた。恐怖に叫び声すらあげられなかった。背に氷を入れたように身体が跳ねて動かなくなる。

唇に感じるひやりとした温もり。用心深さを垣間みせるかのように、口を抑えられた。知らない手、知らない温度、知らない感触。

——・・・、わるい

——きもち、悪い、きもちわるいつ・・・!!

雷に打たれたように頭が真っ白になった。黒い瞳孔が開く。眠たくないのに眠りに落ちるように、ずっと意識が身体から切り離れそうになった瞬間、

——手が離され埃っぽい空気が私の意識を引き留めた。

口の周りを自分の腕で拭いとりながら振り返ると慌てた声が出た。

「ちょ、ちょっと待って！頼むからちょっと待って！？」

「・・・だ、れ」

振り返った先にいたのは一言でいうならチャラチャラしたレゲエな兄ちゃんだった。肩につきそうなくらいの橙色の髪を何本も編み込んで後ろで一つにくくっている。

掠れた声を絞り出しながら、こういうタイプが苦手な私が無意識に一步さがるとあからまさまに慌てふためいた。

「ごめんってー！別に嬢ちゃんを襲おうとかそういうんじゃないからね？」

ぐだぐだと小さな声で弁明してくる男をしらーと半眼で睨めつけた。見た目も胡散くさいのに、瞳を隠すようなサングラスがさらに胡散くさを倍増させている。

怪しい、怪しすぎる。私の視線にたじろぎながらも、男は困ったように頬をかいた。

「嬢ちゃんが多分行きたがってる市場はあっち」

男の指してる方向は私から見て右手側だった。そうか、あっちなのか。でも、本当に？疑うように下から見上げると男はおどけたように笑って肩を竦めさせた。

「俺って信用ない？」

「・・・」

瞬時にはいい、と肯定したかったが言いたいことを八つ橋にくるむは国民性の為か、あえてのノーコメントを切り返した。長い沈黙が落ちた雰囲気の中、男は気まずそうに乾いた笑いを漏らし顔を背けた。

「と、とりあえず市場はあっち！ささ、ほらほら行った行った」

「え、あ、」

ばんばんと背中を押されてタタラを踏んだが男は強硬手段に出てマントの下にあった私の腕をつかんで歩き出した。振り払おうとしたけれど、ふいに見えたサングラスの下、橙色の瞳が凜と前を見据えていて、その選択肢が身を潜めた。

だが、不信任は拭えない。さっきの魔物売買をこの男も見ていたはずだ、あの場所にいたのなら。同胞がそんな目にあっているのにどうして、平然と立ち去れるんだろう。

「なんで」

「ん？なーに？」

独白するような小さい声だったのにこの男の耳は捉えたいらしい。視線を足元に向けた。

「さっき、の、止めないんですか」

「あー、俺一人じゃ誰も助けられないし、そんなら巻き込まれそうだった可愛い女の子を助けた方がいいじゃん？」

「・・・すみません」

笑いながら言う彼に、私は謝った。彼は、本来私を見捨てるのが定石だったのに敢えて私を切り捨てなかった。理性で感謝すらせよ、心の奥底ではどうしても信じることができない。そんな気持ちに目蓋を一瞬閉じた瞬間、

——遠くで誰かの叫びが聞こえたような気がして

「ごめん、なさい」

眼をぎゅ、と閉じて身体の奥から声を絞り出すと、男のサングラスの奥の橙色の瞳が細まって「いーよいよ」と明るい許しが降り注いだ。

私は『私』だ。

脇道に入ると、悪魔や魔物たちが路地を闊歩しているのがちらほらと見受けられた。

さっきまでは全く見かけなかったのに。若干不思議な心持ちで彼らを眺めた。うん、不思議。

上を見てみると高い石造りのビルの隙間から黒い空が見える。狭い所にビル群が建てられているので、道が狭く両壁にはさまれて圧迫感に苛まれる。

というか、レゲエさんいい加減に手を離してくれないかな・・・。

じいつと掴まれた腕を睨むとテレパシーを感じとったみたいに突然ぱつと腕が離された。おおおう。そろりと見上げるとこちらを見ていたサングラスががきらりと光に反射して眩しさに目を細めた。

「ここまっすぐ行けば市場に出られるよ。俺用事あるからここまでしか案内できないけど。悪いね」

「いえ。なんか、色々すみませんでした」

「嬢ちゃん律儀だねー、わざわざどうも」

指をさされた方へ、にこにこ口元に弧を描いてこちらに手を振るレゲエさんを背に裏路地を出た。

突如として広がった真昼の眩しさに思わず左手で目を覆う。さきほ

どまでの静寂さが嘘のように賑やかだ。

「さっきのレゲエさん本当のこと言ってたんだ・・・」

嘘だと思ってたのに。ぽつ、と風いだ湖に波紋が静かにうまれ、そして消えていった。

城にはないこの賑やかな光景。魔王城。

しんとした長い廊下のアーチ状の窓からはひっそりとした月明かりだけが射し込む。擦れ違う魔物は頭を垂れて、靴の音と自分の呼吸音がゆるやかに耳朶をくすぐる。

そんな大嫌いな場所。

だけど、この世界において『魔王』を絶対的に庇護してくれる拠り所。ふいにまた、遠くで誰かの叫びが聞こえたような気がして。笑顔が溢れる市場で一人、唇を噛み締めて逃げるみたいに人混みをかきわけた。

『魔王』である以前に私は『私』であって、『私』を構成している土台までこの世界に上書きされる謂れはない。もしも、『私』を私自身が否定したのなら、それは元の世界との繋がりのひとつを自ら消すことになるのだろう

——それはとても、恐ろしいことだ。

だから、だから私は『私』の心に従ってここまで来た。

目の前に佇んでいる古い石造りの屋敷をベール越しに睨みつけ一歩踏み出すと、思い思いに寛いで居た魔物たちが零れ落ちた黒髪に吸い寄せられるように、視線が私に集まっているのがひしひしと分かった。

ごくり、と一度喉を鳴らす。

私は、『私』を守るために使えるものなら『魔王』ですら利用してやる。

「責任者に会わせろ、今すぐにだ」

ふいに吹いた風に胸元までの黒い髪が舞い上がった。

魔王城のとある執務室で、上級役人は胃をきりきりとさせていた。それもその筈、執務室の第二の主人である銀の機嫌がすこぶる悪いからである。

先ほどから少しずつ溢れ出している彼の異質な魔力にあてられている上級役人は、それでも耐えているのだから中々のものである。上級役人の名も伊達じゃない。

余談だが扉を越して溢れるくらい異様な雰囲気を感じた彼らは普段ではこぞって出世のために銀や魔王の前に目通したが、今回は皆して役目を押し付けあった。

結果、じゃんけんで生贄を決めた。公平なじゃんけんであるにも関わらずその場には死屍累々その他が転がっていたというというのは蛇足である。

「こちらに各自治州の予算案を置いておきます」

「わかりました。あと、その持つていって下さい」

「あ、はい！で、では失礼します！」

ぴしゃりと怒られたわけでもないのに慌てて執務室を出て行く役人を尻目に銀は羽ペンを走らせた。だが、またもや継いだノック音に思わず力を込めた羽ペンが軽やかな音と共に無様に折れて机の上を転がった。

失礼するぞ、と渋く低い声がして幾許後に扉が開かれた。彼の護衛役である先導^{リクトル}警士が扉を支えている。

「いま宜しいか？」

「刑部尚書殿……。ええ、大丈夫です」

そこにいたのは刑部尚書、紅^{くれない}だった。闇色の軍服を手を抜くことなく身に纏い、肩には彼の階級を示すような羽のエンブレムが煌めいていた。刑部とは警察機構であり、無法者の取り締まりを行う部署である。

紅の後ろへと撫で付けられた髪の下々に白色が混じっており眦に刻まれた皺が歳を感じさせていた。けれども歳をとるにつれ紅の、文字通り紅色の――瞳はより強い鋭い光を湛えさせており、銀は紅を前にするだけで気が引き締まった。

頭が冴えていくのい比例して溢れていた魔力が身体の内側に戻ってくる。座ったままだと失礼だろうと椅子から腰をあげかけるが、紅はすぐに終わると手をあげて制した。

「下がってくれるか、薄^{うすべに}紅」

「御意」

下がれと命じられた紅の先導警士である薄紅は刈り上げた薄紅色の頭を下げ、静かに退出した。

「先ほど連絡があつて魔王さまが単独で城下警備署をご訪問されたらしいのだが、近衛の一人さえも付けずにいたのはわざとなのか？」

「ええ。お忍びでご視察をしたかったようですので」

「それにしても不用心すぎるだろう銀殿。魔王さまの力量を疑っているわけではないが、中界も騒がしいま先導警士である貴殿が離れていい情勢じゃないのだぞ？」

「そうですね。私もそう思いましたが、魔王さまに先手をうたれてしまいました。不甲斐ないばかりです」

顔色を変えずにそう切り返すと、紅は眉間に寄せていた皺を解いて大きく笑った。威厳に満ちた厳つい長官の顔が一度笑うと瞬時にとつつきやすい気安いおじさんになるのがとても奇妙だった。

「天下の魔術士である貴殿も魔王さまにしてやられたのか！ククっ、貴殿さえも出し抜くとは流石稀代の魔王さまだな」

「笑いごとですか。その稀代の魔王さまに未来をかけているんですよ。——・・・私も、あなたも」

「まあ確かにな。とはいえ、あまりにも人間離れしすぎていて逆に恐ろしい限りだ」

「・・・なにがです?」

しみじみと頷いた紅に銀はすかざず尋ねた。

「あの闇だ。・・・『人間』が到底持つ代物ではないぞ」

「否定はしません」

肩を竦め棚の中から新しい羽ペンを取り出した。ですが、と続ける
と窓越しに外へとずらされていた紅の瞳が銀で止まった。

「そうであつたからこそ簡単に魔王さまに据えることができたんですよ」

「違うない」

くつくつと喉で笑つてみせた紅は、すぐさま過去に想いを馳せるように鋭い紅瞳を細めた。

「魔王さまが来てこそ今の平和だな。さて、それでは私はそろそろお暇しよう。魔王さまに関してはこちらから幾人か護衛に付けておくから安心しろ」

「わざわざありがとうございます。・・・ああ、それと全ては内密に頼みますよ」

紅の背に念を押すために言葉を投げかけると、彼は一度だけ振り返って笑い扉の向こうへと出て行った。

見つけられた人間

恭しく通された客室で、私は綿飴みたいにくかふかのソファ―に身体を包み込まれている。足元には幾何学模様の毛足の長いラグが敷かれており、意匠を尽くしただろう木製の机の上には香り高いティーセットが置かれていた。

一見優雅な一時に見えるが、そんなことはない。ていうか、あんまりにも豪華すぎで一般家庭の申し子だった私にはこの空間は果てしなく居づらい。手持ち無沙汰に机をとんとつついた

「まだか」

「申し訳ありません。監視用コウモリも使って魔物斡旋者を搜索中です」

「そうか」

はあ、とため息をついた。私は今魔王さまとしての権力を駆使し、警察機構の刑部に勤める警士たちにさきほどの魔物売買の被害者と加害者の搜索にあたらせていた。

――一度は見捨てたくせに。

そんな風に自分を嘲笑い今なお見捨てると囁く今の私に、『私』が待ったをかけた。日本で生まれ育ってきた過程で蓄積された道徳心が。異世界人である私を構成する土台。

もし今回彼等を見てみぬふりをしたら私は、元の世界からさえも異物とされ弾き出されるんじゃないかと。そんな根拠のない弱音すら蛇のように頭をもたげた時、ばたばたと慌しい音がして思わず扉へと視線を向けると、刑部においての上級警士が苦虫を潰したような顔をした。

とんとんと、扉を叩く音と共に中悪魔だろう警士がファイルを片手に報告に入るが、尻尾の黒いちろちろが不安気にゆれている。

「報告いたします。魔物売買に加担しただろう者を捕縛いたしました」

「ああ」

ふう、と取りあえず安堵の息をついて思わず頬を緩めた。これで少しは罪悪感に苛まれなくてもよくなった。向かい側にいる上級警士がちらちらとこちらを見ては顔を背ける。

チラリズムか！こいつこんなことで何そんな安堵してんだとか思ってたのか。まあいい、今の私は機嫌が良い。というわけで、だ。

「売買された魔物の行方の探索と保護へ努める」

「はっ！」

するりと流れるような敬礼をし身を翻した中悪魔の背を見送ろうとしたが、開いた扉の向こうに見なれた色を見付けて頬を引きつらせた。何百年も熟成させ煮詰めたような紅色。なんでここにいるのダンディーの化身。

あ、あれでも彼の役職考えればむしろ正しいのか！扉の向こうにいたダンディー化身こと紅は呆然と座っている私を見下ろして、その鋭い瞳を細めた。だけど睨んでいるわけじゃない。奴は笑っているのだ。

「これはこれは魔王さま。御前頂戴しても？」

「・・・・・・・・」

表情には出さないが、瞳の奥の光をににこと輝かす紅に、私は拒絶を飲み込んで無言で片手をあげた。

「光栄の至りでございます、さてお前らは各々の仕事をせよ。魔王さまのお相手は私がする」

威圧感ばりばりな紅にも関わらず、私の接待をしていた上級警士は傍目にも分かるくらいぱあっと年老いた顔を輝かせて静々と、だけれども幸せオーラを振りまいて退出した。なんだあの幸せオーラは、そういえば現れた紅を熱っぽい瞳で見つめていたけど、ま、まさか、な。まさか、うん。ひ、否定はしないよ！互いの意思のもとだった

ら私も暖かく見守るよ！

むっすりと思わず黙り込むと冷めた紅茶に気がついた紅が扉近くに控えていた先導警士の薄紅に新たな紅茶を頼んで向かい側のソファ―に腰を下ろした。そこでようやく、めくるめくる妄想の世界から還ってきた私は新たに出された紅茶にハッとして手を付けた。

良い香りがふわっと広がる。

「銀を出し抜いたそうで」

「うっ、ごほ、げほ、うええっ」

紅茶を吹き出しそうになったが、根性で阻止した。咳をしたため下を向いていた顔をあげると、顔一面に笑みを浮かべる紅がいる。器官に残っている紅茶を吐き出しつつ、じっとりと睨みつけた。

「人聞きが悪いぞ」

「むくれるなむくれるな。可愛い顔が台無しだぞ魔王さま」

ぷいっと年甲斐もなく顔を背けると伸びた手にくしゃくしゃと頭をなでくりまわされる。髪の毛がぼさぼさになるー！と必死で頭を上下左右に動かすがぎりぎり強い握力に抑え込められてにげられない。

というよりむしろ私の頭を潰す気がこのダンディー！頭パーンってなるよ！？ひうえい、とびびって身動きを止めると紅が柔らかく笑って今度はあちこちに跳ねた髪を纏めるように髪に指を通した。

このくそダンディー、ワイルドなおじさま過ぎるんだよ！しかも見た目敵ついくせに人好きする笑顔しやがって！てめえに過去に色々とされたこと、こちとら覚えてんだぞ！！そんなことを心中で叫ぶが時々節くれだった指が頬を撫でてくるしで、どきまぎしたまま首をすばめた。

するりと首に節くれた指が這う。

ふえいと小さな叫びをあげた。くくくくくすぐつたい！首は私の弱点だ。アキレス腱に相当するの首である。今なんかを緩めたら笑い転げる気がする！そ、それは嫌だ！

ダンディーの化身、ギャグ要素豊富なオールバックを見事に我が物としている紅と実はクールイケメンな刈上げ短髪スーパーマッチの薄紅の前でそんな羽目になったら羞恥心で灰と課す。乙女にあるまじき大爆笑をぎりぎり歯を食いしばった。

「主、お止めを。不敬にあたりまする」

「おや、それは困るな。失礼致しました魔王さま」

くくく、と喉で笑いながら向かい側の椅子に浅く腰掛けた紅に安堵の息をつき、紅を諫めてくれた薄紅を見上げた。微動だにせずに紅の後ろで凜と仁王立ちしている。

「久しぶりだな薄紅」

「はい。お久しゅうございます」

そう、紅の先導警士である薄紅と出逢うのは久しぶりである。紅、薄紅。この二人は私の正体をしている。なぜなら彼らは銀の協力者であるからだ。間違っではならない。私じゃなく、銀の、だ。

ほんの小さな微笑みを浮かべてぺこりと薄紅に頭を下げられた。薄紅の礼儀正しさに自分の先導警士の銀と比べて思わず熱いものがこみ上げてしまって「くう、」とベール下から目頭を覆ったが魔王さま、と紅に声をかけられ手を離れた。

「なんだ」

「いえ、やはり魔王さまはお優しいことだな、と」

「………どういうことだ」

誉められているように思うが、これは上辺だけの言葉だ。紅の瞳の奥に別の感情が見え隠れしているのにすぐに気がついた。

この世界の生き物はどうか感情がすぐに顔にでてきてしまっている。最初は、感情表現が果てしなく豊かなんだなと関心したがなんてことはない。RPGを思い返せば良いのだ。ほら、キャラクタ

「たちの立ち絵とかつて基本表情豊かでしょ、あれだあれ。」

クールキャラとか言って表情豊かじゃないのもいるけど、それでも隠せない所がある。

——だからこの世界の言葉をそのまま受け取ってはならない。

彼はこの世界の住人だから気がつかないが、異世界人である私には分かる。瞳の奥に隠された本当の感情の篝火が。

きゅ、と眉根をよせて続きを促すと、紅は肩を竦めて好々爺らしい笑みを消した。もはや対峙しているのは、刑部尚書、紅である。

「現時点ですが被害者の中に人間が紛れ込んでいます」

「なに・・・？」

思わず眉を顰めて紅を睨み付けてしまう。だが、一体全体どういうことが分からない。人間が被害者にいる？内界に、人間が？

ふいにキャパシティから溢れ落ちてしまった色々な感情や思考の渦がぐるぐる回って意識が奪われそうになった。身体は異常に冷たいのにお腹の奥が熱を孕んでじくりと痛みをもたらす。

「・・・からりと乾いた口内が、なぜか異様にねばついて仕方がない。」

「・・・薄紅、外で待機しろ。誰も近寄せるな」

「御意」

すぐさま部屋を出て行った薄紅に私は魔王さまとしての全てをかなぐり捨てた。紅も薄紅もどうせ私の正体を知っている。それならば、もう演技する必要なんてないだろう。実際、私も紅も、思う所はどうせ一つなんだろう。そんな確信を持って私は口を開いた。

ザ・勘違い そのさん

いつものように机に噛り付きながら私―刑部の上級警士または副所長―は、

紙に目を通しサインを書く、ハンコを押す。

紙に目を通しサインを書く、ハンコを押す。

紙に目を通しサインを書く、ハンコを押す、を繰り返していた。

大きな事件がおこらない限りこの日々は続くのだろうとそんなことを思った罰だったのか、慌しく飛び込んで来た部下がもたらしたのは非日常だった。

「それいけ魔王さま！」

署内で一番豪勢に作られた客室で、私は今、この世のものとは思えないくらいに非日常と対峙していた。というか、対峙できん老いぼれにそんな気合いも度胸もない。対峙するくらいならもう矜持なんて知らん。ひれ伏すわい！無理無理無理じゃ。

このときほど副所長という位の高い地位を恨んだことはない。

生き地獄とは、正しくこのことかと唾をぐくりと呑み込んだ。視線があげられない。沈黙

の中、ふいに、とんとんと軽い音がして顔をあげると、長くも細い指が苛立たし気に机をたたいていた。

―ぴりぴりとした焼け付くような痛みがかさついた肌を舐めていき背筋が粟だつ。

滅多なことがない限りお目通りなど我が身では叶わないそんな雲の上の存在である魔王さまが、まさに、いま！目の前にいらっしやるのじゃ。

現魔王さまは、あまり政治舞台にも夜会にも御姿を現さない為に口さがない魔物たちが現魔王さまは『魔王』に相応しくないのではないのかと笑っているという噂を聞いたことがあったが、今すぐこの噂を流した元凶の口さがない馬鹿者をしょっ引きたい。

噂を信じていた己も大馬鹿ものであるが何よりも元凶が悪いんじゃない！（副所長として魔王城に登城できても、まさか天下、いや魔下の魔王さまにお目通りなんて叶わない！だから信じてしまったんじゃないよ魔王さまは『魔王』として不相応だと！！）

そんなぶるぶると震えているなか、魔王さまが口をお開きなさった。

「……………まだか」

——戦慄が、走った。

それはまるで、雫ほどのマッチの火が一瞬で海を干上がらせた、そのくらい衝撃をもたらした。低くもなければ高くもない中性的な声音はただその三文字だけでこの私を恐怖へと引きずり込んだのである。それぞ、まさしく生き地獄の如く。長らく生きて年寄りに該当するこの私をたったのその三文字だけで。

——これが、この内界の魔の王たる所以なのか。

言の葉にまで流れる禍々しくも、酷く艶やかな、この闇の気配——

感じたことのない純粹たる闇に意識が奪われ朦朧となりそうになったのを叱咤して張り付く喉を震わせた。

「も、申し訳ありません。監視用コウモリ、も、使ってま、魔物幹旋者を、搜索中です」

いつもよりしわがれた聞き難い声に自分で自分の首を絞めた気がした。恐る恐る魔王さまの反応を待つと、そうか、とのお言葉の後に、ひとつ、息を吐かれた。身体中の血がざっとさがる。その溜息は語っている。

——我が手を煩わせるな、と。

偉大なる魔王の配下に無能な奴はいらぬと。お前の代わりなどいくらでもいるのだと。どくどくと、心臓の刻む音が酷く耳障りだった。

静かに、静かに、静かにせい！魔王さままでこの煩い音が聞こえてみる。それこそ魔王さまの機嫌をさらに損ね、音を刻めなくなるぞ！！

青白い顔をさらに青白くさせ戦かすと、慌しく回廊を駆ける音がして思わず唇を噛んだ。血がでようと関係ない。もうこれ以上、魔王さまの機嫌を損ねるような事態をもたらさないでくれ・・・！魔神さまに祈りを捧げるように皺だらけの掌を握り締めた。

「ほ、っ、報告いたします！魔物売買に加担しただろう者を捕縛いたしました！！」

「・・・ああ」

中悪魔のもたらした情報は、どうやらプラスのことだったらしい。私は安堵の息をそっとついて握り締めていた掌をそっと緩めた。汗でぬるりとすべる。ほっとしつつ顔をあげ魔王さまを伺ったその瞬間だった。

魔王さまが嗤ったのだ。

口角を吊り上げ、愚か者めと、見下すように！

嘲けり、蔑み、言葉には表せられないが、魔王さまは見透かしておられるのじゃ。私の震え上がる弱い体躯だけでなく私の愚かな考えでさえ。魔王さまの凍るような深淵の闇に怯え、死に恐怖し、それでも尚、生に縋り付きたいというこの矮小で不精な心根を！

その途端、顔をあげるのすら恥ずかしく畏れ多く、恐ろしかった為に顔を背けたが、失礼にあたるのではないかとほっとして顔をあげた。

魔王さまが一度こちらをベール越しに見たのが分かった。なんとも辛い。魔王さまの御前にあることができることなど身の余るほど光栄なことだが、私なんぞの力では、魔王さまの駒ですら到底なりえはしない。

（だってほら見てみる、こんなにまだ身体中が怯え惑っている）

この場からなりふり構わず逃げてしまいたくなった。だが魔王さまから逃げられるはずもないのが本能的に分かっているのだろう。だから、捕食者に“生き物”として喰いちぎられないように、置物のように身体は余計な一切の活動を停止している。

指一本でさえ動かすことが億劫だった。自分は殺され、この偉大禍々しい闇に取り込まれるのだろうか。だが、もはやそれも摂理というやつかもしれん。ふっと諦観に身を預けた。

だが、そんな時だった。

自分の上司である紅尚書が颯爽とあらわれたのである。紅尚書は猛禽類のような紅色の瞳を細めながら、魔王さまに臆せず渡り合っていたのである。そして、私を冷たい瞳でみおろしたんじや。

「光栄の至りでございます、さてお前らは各々の仕事をせよ。魔王さまのお相手は私がする」

ふっと、夢から目が覚めたような気がした。ぶるりと身体が一瞬震えて、息を吸った。紅尚書は相変わらず無愛想な顔をおったが、それでも命の恩人になった御方じや。なんということじゃろう！

おもわず瞳に熱いものがこみ上げて紅尚書に感謝の意を込めて視線を送って意気揚々と席を立った。

（ああ、これが生きているということなんじや・・・）

その日、歳老いた彼は気がついたことが二つあった。
いかに噂が「噂」にしか留まらないということと、やはり日常が一番だということに。

答えはどちら

「ありえないありえないありえなあああああい！！！」

「・・・・・・・・」

被っていた猫の皮を燃やし尽くすが如くに叫びだした私に、紅が少し瞳を見開いたがそんなことに構ってる暇はない。ありえない、人間が内界にいる？内界、中界、外界の三界協定の禁止原則はどうなつたの。

互いの独立保全の為に、わざわざ渡航を禁じているんだよ？

（ま、まあ、魔物たちはちよくちよく中界行っちゃってるけどさ）でもちよつとマジで、なんでそんなことになってんの？！

「馬鹿じゃないの。誰、人間を攫った野郎。そいつ連れてきて殴るの怖いから殴らないけど、ねちねち嫌味いづのは得意だから！」

「まあ落ち着け魔王さま、座つたらどうだ」

鼻息を荒くして地団駄を踏む私に紅は一瞬吹き出すとやれやれと肩を竦めさせた。その子どもを見るような目やめてくれるかな紅。凄じ居たたまれなくなるんですけど。つつかまじで魔物に人間が攫われちゃった？なんなのこれ、フラグ？ねえなにフラグなわけ？

急に渦巻いた倦怠感に「あーあ・・・」と全身から力を抜いてぼす

んと柔らかいソファ―に埋まった。

内界の空気は瘴気を孕んでおり、普通の中界や天界の者が一步でも進入しようとするのならば、瘴気は縄張りを侵された獣のように怒り狂い、その者の肺を灼熱を持ってして紙くずのように燃やし尽くすのだ。

人間が魔物に搔つ攫われたあげくに死んだと公になったら中界の王達になんて釈明すれば良いわけ？

彼もしくは彼女の親や兄弟、連なる人々は突如としてその命が奪われた事実すらきつと知らないのだろう。

もしかしたら今なお彼らは探し続けているのかもしれない。そして死ぬまで生死の分からぬ者を探し彷徨うかもしれない。きつと血眼になって探している彼らは、帰ってきてほしいと願い、内界で死んでしまった人間も故郷へと帰りたいと願っただろう。

・・・帰りたい。

身を裂くようなその気持ちは想像せずともよく分かる。私だつてずっとずっと日本に、みんながいる家に帰りたくて。

降つて沸いた感情に絡め取られるのから逃れるように右手で顔を覆った。

「人間の被害者の遺体を優先的に家族の所に帰してあげて。何にもないよりはまだマシだと思っから」

「・・・それなんだが、」

分かりましたとすんなり返事がくるかと思っていたのだが、珍しく歯切れの悪い紅を見上げるとその顔に戸惑いの色が浮かんでおり私は首を傾げた。まさかどつかの魔物に遺体を食べたのかと嫌な予感がして米神を解し来るべき衝撃に備えていたが思わず面食らってしまった。

「その人間、珍しいことに生きているらしい」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・は？」

「生きている」

二度も言ってくれるな紅。そして落ち着け私の心臓。

「まだ（・・・）生きてるだけじゃないの？」

「それが全くもって異変はないらしい。瘴氣に中てられていないよ
うだ」

瘴氣に中てられないということがどれだけ凄く、珍しいことなのか

紅は分かっているのだろうかそんな平然そうに言いやがって。この世界に召還されてから『魔王』をしているが瘴気に殺されない人間なんて紅や銀の地獄のスパルタの中でも聞いたことも見たこともない。……まあそうは言っても、

——ただ一人の例外わたしを除いて、だけれども

だけどそう考えると、とある可能性が浮かび上がってくる。ある意味それは私にとって希望でもあれば絶望でもある。

さてパンドラの箱の中に最後に残った希望は、果たして希望だけで留まったのか。それとも、絶望を産み落とした？まるで卵が先か、鶏が先かなんていう終わりの見えない水掛け論だ。馬鹿馬鹿しくて笑いさえ零れない。

「ねえ、瘴気で死ななかった人間を紅は知ってる？」

「伝説を除くのなら目の前にいる異世界人まおうちまだけだな」

冷静な紅色の瞳がベールで見えないはずの私の鴉色の瞳を貫く。

予想通りの返答にささくれだった感情が忙しく煮えたぎることはなかった。むしろ、この世界にある自分の異質さが浮き彫りになって今度こそ小さな笑いが零れ落ちたが反比例するように酷い空虚感に心が襲われた。

—— ああそうだ・・・

この世界に、日本はないんだっただけ

——・・・どう足掻いたって此処には私を知る人は、

薄れゆく笑った声で、見慣れた筈の顔で、優しく私の名を呼ぶそんな人たちは

—— だれもいない ——

たとえいつも自分に言い聞かせていたとしても、それと他人に言われるのじゃまるで違う。瞬き一つで崩れ落ちた私の生きた場所、諦めなんかつく筈がない。

だから私は、『私』を貶しめ無い限り、どんなことをしても忘却の海に呑み込まれていく記憶を掬い上げながら。

生まれた世界で生きて死んでいくと、召還というエゴに満ちあふれた理不尽な世界に墮とされた時、この世界を心の底からなじり恨み、喉が張り裂けそうになるくらいに呪い、叫びをあげながら決めた。

――・・・私は異世界人。^{にほんじん} そんなこと私が一番良く知っている。

分かりきったことに対して乾ききった砂漠のような私の心には一陣の風さえ吹き抜けない。

この世界に対抗するために砂漠の中に振り落とした槌で建てた一つの望みはそれがまるで揺るぎない真理であるかの如く。

唇をきゅ、と噛みしめて、今はそんなことを思ってる時じゃないとすぐさま頭を振ってその思惟を振り払った。

瘴気に身を焼かれない人間なんて、この世界にはいないだろう。

――・・・もしまた誰かこの世界に引き摺りこまれてしまったのならば

くらりと視界が揺れて黒色に塗りつぶされた気がした。

——ここはなんていう、理不尽な世界なんだろう。

「その人間に今すぐ会わせて」

「・・・承諾致しかねるが、魔王さまの御意に従うとしようか。私が指示をだした方が確実だ、席を外す」

若干の呆れ、微かな焦燥の色を紅瞳から感じ取ったけれども、それがどんな思惑を孕んでいるかが言及する暇すら今は惜しい。

同郷までとはいかずとも、私と一緒いせかいじんだとしたら、異形の魔物やこの世界に対して如何様な恐怖に襲われるか身を以て知っている。精神一到何事か成らざらんとは言うけれども恐怖に打ち勝つことは難しい。

扉から出てきた紅に薄紅も先導警士の役目を果たすためについて行っているのだろう。取りあえず気を抜くな、私。

無機質に冷え切った紅茶をゆっくりと飲み下し、長い息を吐いた。

「もしも、同郷だったでしょう・・・？」

もしも。もしもが本当になったら。

きつとそのとき私はどこの出身か聞いて今の日本の状況を聞くだろう。それで元の世界に帰れる切欠を手に入れられるかもしれない。だけれども、もしも同郷ではなく万が一の確率で瘴気の効かない中界の人間だったら？

そう考えると希望が絶望に、絶望が希望になんてことになるかもしれない。そんな手酷い弄ばれ方があるだろうか。

希望ほど実らなかったとき惨いダメージを受ける

ぼんやりとソファーに腰掛けながらメビウスの環のように終わりの見えない論題を一人で黙々と議論していたとき、虚ろな瞳が銀色を見つけた。

見慣れてしまった銀色を纏う彼は、政務官でありながら私の先導警士でもある銀だ。魔王城で最後に見たときと同じような格好をしている。長い足下までの黒色の外套はまるで魔術師のようだ。いや、実際彼は優秀な魔術師であるが。

そう考えるとあまりにもイメージにぴったりすぎて思わず小さく笑ったら銀の眉に皺が刻まれた。あー、なんかお怒り？

「執務から逃げだした挙げ句、そのように呆けておられるとは余裕ですね魔王さま」

「わーお、何時間かぶりの再会なのに相変わらず辛辣だね」

重苦しい扉にもたれ掛かり、腕を組んで冷ややかにこちらを見据える銀に私はそろりと視線を外した。機嫌の悪い銀を逆撫でするべからず。一を言ったら百で斬り返される。というか木っ端みじんに斬り捨てられる。

分かっているけど、まだどこからどこまでの範囲が銀の怒りの琴線に触れないのか謎である。縮こまった私の耳が銀の溜息を拾い上げさらに縮こまった。・・・誰かに怒られるのは、嫌いだ。

「紅尚書からコウモリが執務室に届けられたので大体の話は把握しています。死なない人間がいると」

「うん。で、私も紅にその人間との面会を申し出たところ」

「本当に魔王さまは厄介事を持ち込んでくれますね。私を過労死でもさせるつもりですか？」

「そんなつもりはないけど・・・」

尻込みすると銀は紅が座っていた所と同じ向かい側のソファに腰を落ち着けた。

「口調」

「あ、ごめん」

常々言われている口調がいつも通りになってしまっていて目敏い銀にぴしりと言及された。紅とずっと普段の口調で喋っていたのが原因なのかもしれない。

とはいえ『魔王』としてのあの口調も如何なものかと思う——と、批判したら銀に嘲笑われながら「魔王さまは隙が多いようですからそれを考慮すると会話なんて必要事項のみでも事足りるでしょう」と言われた。

つまりはあれか、お前は気が抜けてるばやばやだから黙ってるってことか。と後になって気がつき、ひくつく口角を抑えた記憶が懐かしい。

「それと次から城下を視察するのなら、置き手紙ではなく私に直接仰ってください」

「………はい」

「幼子のように間を伸ばさない」

ああもう本当に手厳しいな。まあ慣れたけどな！吹っ切れるように顔をあげると銀がふと扉の方へ視線を向けた。せっかく人が顔あげたのにどういうタイミングだよ、と内心思ったが銀が立ち上がった扉を開けると薄紅色の髪の毛が銀を通して見えた。

薄紅だけ？と首を傾げたら勿論、紅もその後ろにいた。紅と薄紅がここに来たということは、つまり……。

「おや銀殿、早いお着きだな？ああ、魔王さま。面会の準備ができましたのでどうぞこちらへ」

「人払いは済んでおりますが、どうぞお気を付けくださいませ」

扉を支えながらも胸に手を当てがい、ゆるりと下げられた薄紅色の頭を眺め私は一度ゆつくりと瞳を閉じて開いた。進む先には紅がゆつたりと鷹揚に私を待っている。この部屋から出たら私は魔王にならねばならない。

一体どこに行けば私は私を偽る必要がなくなるんだろう？そんな想いが駆け巡ったけれど一笑に付した。

右後ろに佇む銀の存在を一度確かめて私は踏み出す。

——…この小さな一歩が元の世界に通じる大きな一歩だと信じ
て——

対面を果たしたけれど

人工太陽が遮断されている酷く無機質な石造りの廊下に影が揺れた。天井は高くせにあらゆる無駄を削ぎ落としたかのような窓一つない暗く冷たい収監棟に息が苦しくなった。ほの暗い足元を照らす夕陽のような槐色の炎を燦らす蝋燭が壁に規則的に掲げられている。

無骨そうに一見感じるがよくよく見ると蝋燭の燭台は黒漆で塗られているようで零れる仄かな光に反射してしつとりと輝きを滲ませていた。足音を吸いとる絨毯はなく複数の床を蹴る音が静かに響くけれども、いくばくかの余韻を残して揺れてどこかに溶けて消えた。

私と紅、そして先導警士である銀と薄紅以外に幾人かの護衛の警士、そしてこの棟の副責任者も伴ったの行脚だ。多いということなけれ、本当はもっと護衛なんだとぞろぞろ引きつれる羽目になりそうだったんだから。

隠密行動というかプライベートだから邪魔もとい気を使つなと言った結果での譲歩だ。

「魔王さま、この先の部屋でございます」

「ここで待て」

こつんと、硬いブーツで床を蹴って先頭に出ると言いつけ通りに紅たちは待っているようで身動きしなかった。ばくばくする心臓にまるで身体までも鼓動しているようだった。まさしく一心同体ってこのことなのかな。

ふつと浅く息を吐き出し深く吸い込みまた一歩ふみだすと銀色が右側の視界にちらついた。当たり前とでもいうように一歩下がった右斜め後ろについてきている。まさか一緒にくるつもり？そんな、まさかだろう！期待を込めて待っててと念を押すが、

「銀」

「私は魔王さまの先導警士です。何時如何なるときも付き従う誓約がございます」

顔色一つと変えずに宣ったその顔に熟れでぐちゅぐちゅになった生暖かいトマトをぶつきたい！しかも腐りかけの！いついかなるときも付き従う？は、くそくらえ！ふん、と鼻で笑ってやった。お前はストーカーかこの変態。

監視役、ご苦労なこった。

銀こそそう口には出さぬが瞳に浮かんでいる色はまさしく警戒のそれだ。嫌だ嫌だと駄々をこねて逃げ出したとしても、結局私が銀から逃げ切れられないのが目に見えているくせに。腹立たしいにもほどがある。

「勝手にするがよい」

嫌味っぽくちよつと魔王チックに言ってみた。ら、なんの感慨もなさそうに「あり難き幸せ」と返された。つまらん。

数メートル先のコンクリートがうちっ放しの扉の前に立ち、暴走する鼓動を無理矢理押さえつけ手を伸ばした。ときどきする。マントの裾からのぞく黄色がかった白くて細い腕がほの暗い中でいやに浮き彫りになった。

さ、さて。開けるぞ。開けちゃうぞ！こんなんでビビってどうする私！！すーはーすーはーと落ち着かせるように深呼吸して。すいっと眼を細め、覚悟を決めた。

・・・はずなのだがやはり緊張してカタツムリみたいのにのろのろと手が伸び、指先がドアノブに触れたその一瞬、

——切迫した声が空気を切りさいた。

「！魔王さま！！」

「痛っ！」

ノブに触れた指先を静電気のような痛みが走って思わず手をひいたが突如として空気を切り裂く轟音を伴わせながら扉を巻き込み壁一面が爆ぜた。

「うひゃあっ！？」

真っ白な視界の中、散乱した灰色の瓦礫の破片が眼に飛び込んでく
るのが見えて反射的に目をつぶって膝を抱えるような形でしゃがみ
こんだ。がらがらと直ぐそばでコンクリートみたいな塊の落ちる音
に身体が緊張したその瞬間、

——ドガアアアアン！！！！

「またかよチクショー！！！！！！！！！！」

ぎゅ、と頭を抱え込む。

二度目の爆音に纏った外套がバタバタと爆風に煽られた。

真っ白になった脳内のくせに、ずらずらと言葉の羅列の波が押し寄せ
混乱をなんとか押しとどめようとするが、中々簡単にはいかない
というか、これになになになにに！！意味不明すぎる！わけわかめ
！！

身をこれでもかというくらい縮こませ、両手で咄嗟に口元を覆った。

「魔王さま！どこにいらっしやるのですか！？」

砕けた破片がガラゴロと転がる音の中に慌てたような銀の荒げられ
た声が聞こえてキアラに似合わないなあと思わず笑いそうになった。
余裕ないくせに余裕だな私。テンパリ過ぎて逆に変に冷静なのか？

ずっとベールに守られた両眼を開けたが、粉塵が視界を埋めつくして何も見えない。だけど、一つ、違和感。

「・・・静か？」

さっきまでの劈くような爆音ってほんの数秒だけでこんなにも静かになるものなの？

破片が転がる音すらせず気がつくと、しんと静寂が広がっていた。

とりあえず私は膝に力をいれて立ち上がった。とはいえへっぴり腰なのは否めないが。眼の前でなんか爆発するのなんて始めてだよ。初体験だよ、ふざけんなよ。

きよろきよろと見回すけどやっぱり視界が悪い。

「・・・銀？」

おそろおそろ銀の名を呼んでみるが、反応がない。さっきは銀の声が聞こえてたのにも関わらず。不思議に思って首を傾げたが、はっと気がつき顔を青ざめさせた。

もしかして、放置プレイ？新手のイジメ？ねえちょっとそれはないだろう。扉ぶっ壊したの私じゃあるまいし。

足元に視線を落とすと、履きなれたブーツが見えた。そしてそこからゆっくりと視線を上げてみるとあいかわらず周囲は粉塵で視覚を奪われている。身体が無事かどうか「ぐ、ぱ

っ」と拳を握り、解いたが引きつるようなぴりつとした痛みがして手の甲を見下ろすとうっすらと血が滲んでいた。

爆発したとき何かで切ったのかな。こういう傷って痒くなるからあんまり好きじゃないんだけど、でもさっきの爆発でよくもまあこれだけだ済んだよ。

節々を動かしてみても痛みはない。健康体そのものだ。外套が欠片から身体を守ってくれていたし、ベールは言わずもがなである。自分の運に心底感心してうんうんと頷くけれども、突拍子もない状況が理解不能すぎて極地に達した緊張と不安がふつつつと苛立ちへと変わり小噴火して声を荒げたさせた。

「銀！あんた無視してるでしょ！？視界も悪いし何がなんだか分かんないんだけど！！ていうか何これドッキリ？もうドッキリしたから早くこの砂埃どうにかって……え？」

そこまで言っではっとした。

手がみえる。それにこれって、

「霧・・・？」

視界を埋め尽くさんばかりの粉塵だと思っていたそれは落ち着いて観察してみると、水蒸気、もはや濃艶としか言いようがないくらいの霧だ。

吐息が白む冬の凍てつく朝明けにどこからともなく現れるあの。

だけどさっきのような違和感がどこかまたひっかかって胸のあたりがもやもやする。なぞなぞが解けない時みたいにすっきりしない。

「なんか変。だけど、何が変なの・・・？」

首を傾けてると、こつんと靴先に感触があつてその原因に視線をおろしゆるりと身体に視線を這わせた。

ブーツの硬い靴先。濃い藍色のズボン。身体のラインを覆い隠す膝丈までの黒い外套に、覗く深紅の内布。繊細な紋様が刻まれた純銀の留金が外套の軽やかさを重厚に見せている。

外套の間から両手を出して、唐突に理解した。顔をあげて確認したがやはり視界は霧に閉ざされている。それなのにどうして、

「こんなに自分のはつきり見えてるの？・・・なにこれ魔法？」

「魔王さまー！」

「銀！」

聞き慣れた声に、ぱつと振り返ると霧の向こう側で銀が安堵するよう肩を撫で下ろしたのに気がつき思わず瞠目してしまった。

どうしたのだ銀！そんな顔はキャラじゃないよ！内心恐れ戦いてると波が引くように霧が薄れ始め、周囲を警戒しつつも銀が近寄ってきた。

「魔王さまお怪我は？」

「え、ないよ」

反射的にないと答えてしまったが、手の甲の傷を思い出しぴくりと肩が震えたがあれくらい小さい傷は怪我には含まれないだろうと再度肯定するために頷いた。

じろじろと下から上へと銀に観察されたと思ったら両手が伸びてきて・・・外套の中に手をつ込まれた。

「ぎゃあ！セクハラ！」

逃げるように後ろへしとどを踏んだが銀は歯牙にもかけず私の両手を空気に触れさせた。手の甲から、じわつと血が滲んだつつうか、さつきよりも血滲んでね？それでもかと眇められた銀色の瞳から逃れるように、そろりと私は視線を外すと拘束された両手がぎりぎりと締め上げられ、

「ってイタタタタタ！！痛いわ骨折るつもりか離せ離せ離してええ

えええ！！！！」

ぎゃーす！痛い痛い！！ぎりぎりぎりに加わる力に手だけでなく全体を使って逃れようと奮闘するが涼しい顔をした銀の様子から何の障害にもなっていないようだった。

魔王城に引きこもり同然のもやしのくせにその細腕のどこにこんな力隠してたわけ！暴れた時にボールが落ちてしまったのか頬を直接髪がくすぐった。加えられる痛みにじわりと涙が浮かんだ。

（これ絶対痣になる、むしろもうなってる・・・！）

ていうか、傷だって私が悪いわけじゃないじゃんか！私たんなる被害者だよ？！なのになんなのこの仕打ち！！理不尽さに腹がたってじとりと見下ろしてくる銀色の瞳をキツと睨みつけた。

ささやかな反撃にビックリしたらしく微かに銀色の瞳が見開かれるが、んなことに突っ込む気力はない。

「痛い。離して」

畳み掛けてそう言うのと拘束されている力が弱まった。ほっと胸をなで下ろして両手をひいて解こうとすると怪我をした方の手をやんわりと捕まえられ顔に近づけられた。むろん私の顔ではなく、銀の、だ。

なななななに。身体を仰け反らせる。

「ちよつとなに？」

「すぐ終わりますから動かないで下さい」

ぴしゃりと一方的に言われ、反論しようと口を開く間もなく、

手の甲に柔らかい、口付けがおとされた。

——マシユマロみたいな唇が傷口を労わるみたいかすめて

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよつと!？」

私の慌て具合を歯牙にもかけず、軽やかなキスが何度も角度をかえてついばむように落とされ・・・って

手の甲にちゅうとか刺激強すぎなんですけどというか銀さま御乱心ー!! ものども出あえであえええ!! ぎゃああああと脳内合戦を繰り広げ意識をとばしていると、唐突に、ぬるりとした感触に背筋が泡立った。

そう、まるで犬かなにかに舐められたまさしくそんな感じの。

はっとして銀を見上げようとするともう一度傷が舐められた。犬猫とは違う未経験なそれに、素直に背中を震わせようやく顔を見上げると銀色の瞳がずっと細められ、じくりと傷口が疼いた。

ふいに伸ばされた赤い舌が唇をぺろりと舐め、酷く官能的に傷口を蹂躪する。月光を反射したような銀色の髪が手の甲を撫り、蕩けるような熱い吐息が肌を粟立たせ、ぞつとするようなくらい艶やかな熱く潤む銀色の瞳と闇色の瞳が交錯した。

ここではつきり言っておこう。私は彼氏いない暦〓年齢である。ちなみに年齢は聞かないで欲しい。女はいつまでたっても乙女なんだから。高校生？大学生？社会人？それとも熟女？ふん、どんなものもどんとこいだ。もうなんで私に彼氏できないんだろう。なにゆえですかお代官さま。じゃなくて、ええ、まあつまり、かあツと顔に血がのぼる。

自覚はないが涙でそう。突飛なことに神経が興奮しており、思考がぐちゃぐちゃだが、予想どおりにこういうのに免疫ないんだよ！！なんなの銀！いつもは澄ました顔してるくせに何でそんな色っぽい顔もででできるの！？収容所の暗さを始めて頼もしく思いつつも頬を染めてふるふる我慢していると手の甲が強く吸われ、ちゅ、という可愛らしい音をたてて顔が離れていった。

ぱつと勢いよく手をひっこぬく。

「あ、ありえない。銀の変態。セクハラ、すけこまし！」

「はい？」

「肯定したー！もうやだ先導警士は薄紅が良いー！！」

女よりも女らしい銀の色気が恥ずかしいやら悔しいやらでぎゃんぎゃんと地団駄を踏みながら喚くと銀は理解に苦しむとでもいうように眉根に皺を寄せ考えた素振りを見せたが、ああと納得したように肩をすくめた。

「さっきのは魔王さまの匂いを消すためにしただけです。でなければ私があんなことするわけじゃないじゃないですか」

「においてなに！乙女の純情踏みじるなよ！」

「そーよお？そんなこと言っちゃだめ！」

「だよねー……………はい？」

誰だ今のおおお！？女子高生みたいなノリで思わず肯定しちゃったけど！銀を思わず凝視したが彼は「私じゃないですから」と非常に冷めた眼をして睨みつけてきたが、すぐに切り替え、突如割り入った間の伸びた甘ったるい声を持つ第三者を探そうと視線を滑らすと壊れた扉の向こう側から、につこりと笑った女を見つけた。

いったんてったい

「はわっ、いったあい！」

すってんと顔面から突っ込んだ第三者、彼女の見事な転びっぷりに思わず私は感嘆の声をあげそうになった。三流ギャグでも見てるようである。

ひーんといまだにおでこを抑えながら膝をついている彼女を助け起こそうと駆け寄ろうとしたが、銀が咎めるように私の前を遮った。

「ちょっと邪魔だよ」

「しのこのいわずまずはベールをかぶって下さい」

「なに警戒してんのさ。あのご魔物売買の被害者でしょう？早く無事確かめようよ」

「取り敢えずそこから動かないで下さいね。その女、手を上げなさい」

噛み合わないちぐはぐな会話で、ふいつと軽く流されたと思ったら今度はホールドアップ要求ですか。どこの警察だ。あ、いやここ確かに警察機構、刑部の管轄だけどさ。

彼女がゆっくりと顔をあげたのが見えた。甘い胡桃色の髪がふわふわと腰元まで流れ、綿飴みたいな髪と同じ大きな胡桃色の瞳。小型

犬みたいなたれ目がちな瞳を飾る長いまつ毛が困惑気味に震え、厚いぷっくりとした唇がぼかんと開かれていた。

間抜けた顔をしてるけどそれすら愛嬌があって可愛らしい。

顔がよろしい人ってどんな表情してもよろしいから羨ましいわ。ぎりつと白いハンカチーフを噛み締めようとポケットをまさぐったが、出てきたのは昨日食べたチョコレートの包み紙くらいだった。

あまりの女つ気のなさに絶望した！

一人で落ち込んでいると銀が彼女の片腕にはまっている黒色の腕輪を確認し、ぱちんと指を鳴らす。

「まだベールかぶられていないんですか？仕方ない人ですね」

呆れたような言葉とともに、ぱふつとベールを銀にかぶせられたが髪の毛がベールの宝石の飾りに絡まって地味に痛い。ふいに伸ばされた手に反射的に一歩足が下がってしまい、はつとして顔をあげたが銀は気にしたふうもなく子どもを宥めかすように少しだけ頭をなでつけた。

「待機させている紅尚書たちを呼び検分させますので切り替えを頼みますよ」

「……え、あの子は？」

「参考人として連れて行きます。念のため周囲に魔法封じも施しましたし」

「そ。了解。あーっと、すみません、あと少しだけ我慢してもらえますか？あ、安全はもちろん保障しますから！！」

大きな声でそう告げると彼女はきよとした顔をしてこくと頷いた。あの子もなんか怪我なさそうだし、まあなんとか保護できるだろう。

ぽかんと子供みたいに私を見てくる彼女に大丈夫だよと安心させるように笑いかけた。

胡桃色の瞳が一度二度と瞬かれたが気づくことなく私は横で銀が両手を一度、打ち鳴らし空気を揺らしたのに意識を集中させていた。さあてと、魔王さま魔王さまと。

——こほんと喉を震わせ調子を整えておくと顔の横で突如火がふいた。

・・・いや、正しくいうなら火炎放射？

顔すれすれをかすっていったそれを凝視すると、細長い炎が連なつた小龍のように空気を舐め宙をかけていった。

似た光景を具体的に引つ張り出すのであらば、あれだ、透明人間が花火×百を携えながら猛ダツシュしてる感じ。自分でも何をいいたいかわけわかんないけど、そんな感じなのよ、うん。でも、ねえ？

ぎぎつと背後に立っている彼をゆっくりと振り返るが奴は平然としたように佇みつつ、白く長い人差し指を静かに降ろした。

あのさ、私は関係ありませんみたいな顔してるけど、人差し指の先
 っちょに炎まわりついてますよお兄さん。

「てんめえええええ！！！！！」と胸倉を掴み上げがくがく震わせたかったが、今は魔王モードなのである。私は今、冷静沈着かつ寡黙な魔王さま！！

ぐつと激情を飲み込み、笑顔を浮かべた。

「なんだあれは？」

「紅尚書たちに異変に気がついてもらおうと。この場を離れるわけにもいきませんので」

•
•
•
•
•
•
•

「ああ、紅尚書たちがいらしたね」

しれっとしているこのクソ顔、いつかぎやふんと言わせてやる。

とりあえず魔力の残滓と検分、改善を命じた銀と私は彼女、胡桃色のクルミをその場から連れ出し魔王城の客室で保護した。その間に話した感じではどうやら少しばかり特殊な中界の人間であるとの検討がつかれることとなった。

「つまり先祖帰りか？」

「そう考えるのが妥当でしょう。瘴気が効かないのも説明がつきます」

「でも私そんな話聞いたことないよお？」

ソファーに座りつつ、ぽてっと首を傾げた動作に遅れて胡桃色の髪がふわっと揺れた。クッキーをもぐもぐと咀嚼している姿がもはやリスにしか見えなくて、とりあえず眼をこする。目薬も欲しい。というか見かけによらず案外図太いな。周り魔物だらけつつか現に私たちも、人型として魔物力テゴリーに入れられるのに。

「大戦前には異種族同士の婚姻も稀ですが、ありましたからその名残でしょう」

「間子には瘴気が効かないのか」

「そこまでは分かりません。そもそも魔物や悪魔たちが人間と子を

成し、その血脈が残存することが珍しいですよ」

いつそのこと研究所送りにするのでもいいですね。

血も涙もない発言に、銀ならありうると慄いた。研究所に行くくらいならば執務室で缶詰状態の方がマシだと感じられるほどトラウマな場所だ。

脳裏に浮かんだ研究所長の笑みに腕をさする。

あのかくそつたれ研究所所長がいる所に女の人を送るだなんてそんなバカな真似できるかっての。研究の為とかいって孕まされるに違いない。右手を横にふってあしらい肩を竦めた。

「却下だ」

「無論、魔王さまの御意のままに」

「それよりクルミを中界へ帰す用意をしろ。他の魔物が気づくと後が面倒だ」

帰るべき場所があるならば、帰すべきだ。クルミにはクルミの場所がある。

そう思っていたのに本人から紡がれた言葉に息を止めざるをえなかった。

「えっ！私もう帰らなきゃいけないのお？」

その一言に、嫌が応にもひやりと背筋が粟立った。

クッキーに差し伸べていた手を止め顔をあげて気に入らないとばかりに唇を尖らせたクルミは自分の容姿を熟知しており最大限に利用する術を心得ているのか酷く愛らしく見えたが私はその向けられる瞳から逃れるように視線を外した。

心臓が奏でる鼓動がいつもより早く耳元でどくんと跳ねる音がして心臓に全身が支配されるような錯覚さえ襲ってくる。疲れたように右手で両目を覆ってずるりとソファアに背を預けた。

「魔王さま、お話しの途中で申し訳ありませんがそろそろ執務へお戻り下さい。この一件は夜にでも」

「えっと、執務？執務ってお仕事だよね？魔王さま忙しいの？」

ふるりと長い睫毛を震わせて純粹に小首を傾げた気配がしたが、どうしてもクルミに視線を合わせづらい。だって瞳を合わせたが最後に内に燦った火種が息を吹き返す気がして。

――蜷局とくろを巻いた蛇が守っているのはいったいどっちだったっけ

じわりとベールの奥に隠された瞳が熱を孕ませたが零れるまでには

至らない。たとえ泣いたとしても、雨一滴が海に降り注ぐのと同じくらい何にも変わらないのはもう経験済みだ。

「執務へ戻る。紫を護衛に置き結界を張れ」

いったん撤退するが吉だろう。これ以上考えると爆発しそうだ。

独り決めに陥って

私の居場所となった部屋には天蓋つきの柔らかなベッドがあった。

シーツは少しの乱れもなく大きな窓を覆い隠す役目のカーテンは月光を受けしつとりと煌めいている。重厚な大理石でできた机の上には果物や色とりどりの花が生けられてあり豪華絢爛、まさしくその言葉が相応しかった。

一度は夢見たような空間だったけれど、ふいに手に入れてしまうと酷く色褪せてしか見えなかった。

くそれいけ魔王さま！く

私はいたって普通の女だった。

父母兄がいる普通の家庭に生まれ、週末には友達とカラオケに行ったり買い物をしたり。特に料理が出来る訳でもなく、裁縫が得意な

訳でもなく。スポーツだって上中下でいう中くらい。

足の早い子と短距離走で一緒に走りたくなかったし、授業中にうとうとしてしまうことだって多々あった。電車に乗ったら座りたいし、携帯だって開く。

本当にそこら辺にいるような毎日を過ごしている平凡な女だった。

ただどあの日、意識せず瞬きをしたその一瞬、湿り気を帯びた不快な風に頬を擦られ薄暗い部屋の中、立っていたのだ。

視界に広がったのは眩い銀色で、

キラキラと綺麗な銀色だったのに、瞬間的に心が空っぽになった。

私を優しく包み込んでくれた大事なモノが側を離れてしまったそんな焦燥や虚しさ、胸を塞ぐような悲しみに少しの怒りに、はからずとも私は気がついたのである。

まるで息をするようにあっさりと。これが『』というもののなかと。

——ここは内界。魔の王が統べる魔物の国です

——本日この召喚をもってして、あなたは魔王さまとなりました

瞬き一つで奪われた私の世界。

その代わりとでもいうように与えられた魔王の地位。

内界において絶対的な君臨者まおうの名において多少の制約はあるとしても衣食住の保障はされていた。柔らかい上品な衣を纏い、温かいご飯を食べて、大きな城に住んで、生きるには充分なくらいに満たされた環境に私は置かれた。

一日一日を生きるのに必死な人達からみたら今の私の環境は羨望の的、否、憎らしいものかもしれない。

確かにそうだと思う、ポツと出のくせにこのような環境に置かれたからだ。喉から手がでるほどこの環境を欲している人達は多いだろう。私を取り巻くこの環境は酷く満たされているから。

高価な服、舌にのせた瞬間にとろけるような料理、大きく威厳に溢れた魔王城。日本にいた頃とは比較できないくらいに衣食住すべて、今が遙かに上回っている。

――・・・だけど

きゅ、と唇をかんだ。

――だけど、そんなものでどうして、この心を満たすことができる？

たとえ家族四人で暮らすには少し狭い家で。バーゲンセールで買った量産品の安いＴシャツでのんびりして。夕飯に味気ないレトルトカレーが出てきたとしても。

・・・私はそれを家族で小さなテーブルを囲んで食べたい。

だからだろうか。

――もう帰らなきゃいけないのお？

胡桃色の彼女の言葉がどうしても私を揺さぶって仕方無かった。当たり前だろう！と叫びそうになる衝動を理性で掻き抱き押しとどめた。

帰りたくても、帰る術すら見つからない私
帰ろうと思えば、帰ることができるクルミ

それならさ、帰れる術があるのなら、クルミは帰るべきでしょう？

「身辺情報を引き出すように紫に伝える。むい尚、危害を加えることは
許さぬ」

「伝えておきます。．．．それより彼女をどうするお心積もりです
か？」

「．．．言わねば分からぬか？」

足を止め、振り返る。

すぐさま銀から失礼いたしました、と謝罪の言葉が向けられたが心
中穏やかでない。少しの謝意も入っていない上辺面をなでたような
その場凌ぎでしかない謝罪ほど腹立たしいことはないだろう。

振り落とされた模擬刀を杖で薙ぎ払う。
宙に舞った模擬刀は半円の軌跡を描き遠くでからんと音を立てた。

「無様ですね」

するりと自然に口を滑った言葉に彼女は俯いた。
淡々と見下ろした先――服の裾からのぞく黄色い肌には赤黒く変色した痣が散っていた。

「御手自ら取りにお行きなさい」

転がったままの模擬刀を指差しながら告げると彼女は掌でズボンを握り締めよろりと立ち上がった。

俯いたまま伸ばされた腕の一部が青く腫れ上がり常人であればあまりの痛々しさに目を背けたくなるほどであったが、銀は駆け寄ることもなければ労りの言葉もなかった。じつと見据えるだけであった。

――噎せ返るような芳醇な薔薇の庭の中

「構えて下さい」

模擬刀を握り締めた彼女と対峙した。

形状も重量も非力な彼女が使うことを考え搾えられた世界で一つだけの模擬刀。それ故に使いやすさは群を抜いているはずだと毎度のことながら思いつつ、杖を構えた。^{ワンド}

小刻みに震える切っ先を感慨もなく見下ろし、腕を振るう。

もしも、と非生産的な時間を少しでも潰すために思惟にふけった。

思惟の起点はいつも違う。ありとあらゆる場面を想像し対処法を考える。それが常々忙殺されている銀にとって現実に目をつぶり、生産的な時間として昇華するのに必要だった。

——もしも彼女が耐え切れなかったらどうなるか
精神崩壊の兆しが見えたとしたら、どう対処するのが一番であるのか。

突き出された刀に足を一步下げ杖を振り払った。

だが、と反駁する。

——そもそも精神崩壊など関係ない。死ななければそれで——

杖を彼女の頭を打ち付けるように降ろす。しかし、打ち付けた筈の感触はなく寸での所でしゃがみこんだ彼女が見えた。避けられたことは賞賛に値するがそれでもまだ銀を満足させるには至らず、一つ嘆息し肩を竦めた。

「いまの所で下から斬りつければ宜しかったでしょうに。相変わらずですね魔王さま」

慮ることなく杖を降ろし冷ややかに睨めつけた。

肩で荒く息をする新魔王である彼女の呼気はまるで獣のようだったが、彼女は未だ理性がない獣に堕ちてはいない。彼女にとって『彼女』であることが矜持であるからだ。

——元の世界に帰れるなら何でもするから帰して！！帰せこの銀髪！！

闇色に染まった瞳を吊り上げ、恐れも抱かずこの私の胸ぐらを掴み

あげたくせに――

「誰かを傷つけることが恐ろしいだなんて」

――・・・貴女は矛盾ばかりだ――

銀はハッとして頭を振った。

もう随分前の記憶だった。気がつくと前を歩む魔王である彼女に従うように一歩後ろを維持していた。彼女の歩みに迷いはない。始めの頃は先導せねば廊下のはじめで右往左往していたいたというのに。

経った月日を実感したと同時にどこか寂しさに襲われた。

まるで掌から雛鳥が巣立ってしまったようなそんな一抹の寂しさ。けれどすぐさまその感情は胸の奥底へ飲み込まれ理解する前に霧散した。

執務室の扉にかけてある魔術を解除するため人差し指で一撫でしてから開け彼女を通した。後ろ手に扉を閉め再度魔術を施す。

銀は自身の政務机の上の資料を確認し、目新しいものにざっと視線を滑らすと治水やら公道やらの事業の中、刑部からの報告書があった。

内容に目を通し顔を彼女へと向ける。

机の端に広げられた内界の地図と睨めっこしていた彼女はすぐさま気がつき何ごとかと銀をみた。用紙を手を持っているところを見ると資料に書かれている地名を地図で照らし合わせていたのだろう。

蒸れるのが嫌だといってベールが外され瞳はこちらを向いており、滅多にない純粋な闇色はオニキスを思い起こさせた。

「刑部からの報告書で勇者について新たな情報が届きました」

「とどこおりなくダンジョン進めやがって……。で、今どんな状況なの？」

「ツカイトウホから海を渡り、リアオモ領において盗賊と小競合いをしているそうです」

内界地図の上に取り出した中界地図を重ね指で示す。

「盗賊との小競合いイコールイベント真っ最中なのね」

RPGとやらを思い出しているのだろう彼女は米神に指をあて目を細めた。

「イベントクリア後で基本仲間が増えたりするんだよね・・・ていうかあれじゃね、魔物みんな中界でボランティアすれば魔物ついていやつもいるんだな、よし仲良くなるうぜ！ってなるんじゃない？」

「それで、その心は？」

「勇者来る必要なくなるイコール私は死なない？」

「却下です」

がつくりと肩を落とす彼女に何バカなことをいつてるんですかと追いつ打ちをかける。

「そもそも内界、中界だけでなく三界は原則渡航禁止なんです。奉仕作業もなにもないでしょう」

「うっ」

ぐ、と気まずげな表情を浮かべ顔を背けた彼女に内界の地図を片付

けているとポツリと彼女から落ちた眩きを捉えたが、あまりにも囁かな音の振動は脳に伝わらずに不明瞭なものとして終った。

銀は冷静な魔術師、真理に近い者やら御前の賢者などと言われているが紅くれないから「貴殿は保護者」だと形容されていた。

市井にすら広がる二つ名に対して多少なりとも思う所はあつたが敢えて肯定も否定もすることはなかった。

しかし、保護者と形容されたことが酷く不可解で、「この私が保護者ですか」と些かな侮辱を言葉の裏に潜めながら紅を嗤ったが、逆にきっぱりと「保護者だよ」と大笑いされながら断言された。

「さきほどなんて仰られたんですか」

銀は積み重なった用紙に羽ペンを走らせ執務を進めつつもさきほどの眩きを尋ねた。

何だかんだ言いつつも相手の言葉を取りこぼすことをしない、それが彼が保護者といわれる所以であることを銀は気がつくことはない。

なぜなら彼は相手を慮っているのではなく単に自分の知的好奇心なるものに忠実に従っているだけであるからだ。しかし彼をよく知るものにとっては微笑ましい光景に見えるらしい。

「えー？なんていうかさあ、渡航禁止っていうくせに勇者が内界こっちに来ようとしてるじゃん？それって正直さ、協定違反ってこと

で中界に攻撃しかけても良いってことじゃない？」

この人間は時折核心をつく話をする。銀は平然と肯定しつつも舌を巻いた。

協定が結ばれたのは遙か昔のことであるが、三界において幼子から老人まで老若男女を問はず協定のことを知らぬ者はいない。それほどまで浸透している協定であるが、常識として地位を得たのは不可侵条項のみだったのである。

三界協定は三つの柱で成りたっているという事実は王族、政府高官、大天使、上級魔で保持されているのである。

もちろん、魔王である彼女も三原則を熟知している。

「確かにそうですが、これで開戦をするとなると勇者が内界に入った事実や、開戦の正当性を中界、外界に提示してからでないとおこなえません」

「ま、そりゃそうだよな。むしろ堕魔の管理不行届とかいってこっちが喧嘩売られそう」

「とはいえ、もともと堕魔の問題は中界側がうみだしたこと。私たち内界には何の関係ありません」

「魔物のような莫大な力もなければ天使のような智慧もない・・・で、いきついた先が召還ってわけね・・・良いとこどりか」

掌に顎をのせ机に肘をつきつつ彼女は広げてあった地図を丸め、取り合えず、と続けた。

「クルミは帰そう。んで、人間を攫ったバカ野郎どもをさっさと捕まえて処分する。もし今回の拉致が中界に広まって揉み消せない感じなら中界の連中に奴らを引き渡すなりなんなりしよう」

「それがよろしいでしょう。細々としたものは私なりに補足をしつつも魔王さまの御意向を刑部と礼部にお伝えします。今回の件について逐次報告をするよう求めておいた方が宜しいでしょうね」

「ん、よろしく。クルミを帰す日とかはできるだけ早めがいいけど多分いろんな手続きとかあるんだよね？だからそっちに任せるよ」

「はい」

「でも肉体的にも精神的にも正常な状態で中界に帰すのは絶対守って」

「彼女の周辺に厳命致しておきましょう。魔王さまの勅令となれば間違いはおきないはずですので」

銀はするりと筆をとった。もちろん今した話を現実とするために。

ひっそりと広まるその名をこう呼ぶ

銀がしなければならには紫への指令、つぎに刑部、礼部に対しての通達である。

刑部は紅を筆頭にした刑事、軍事組織であるが、礼部は教育や祭祀、外交を職務としている部署である。だがもっぱら外交のエキスパートとしての立場を確立している現状が礼部にはあった。

銀はちらりと魔王である彼女が四苦八苦しつつも机にかじりついているのを横目で確認して立ち上がると、音に気がついた彼女は顔をあげた。

「今からコウモリを呼ぶのでお側を少しばかり離れますが御了承ください」

「りょーかい」

彼女はひらりと片手を振って机へと視線をおとした。

なんてことはない、執務中に時折このように銀は離れることがある。

それは他部署に用事があるときや、通信手段であるコウモリへ言付けするときだ。

当初彼女は態々部屋の外に出ず、その場でコウモリを呼べばいいと当初は心細さもあいまって詰め寄っていたが執務中、情報が漏れないように執務室には防音魔法と遮断魔法が施されていることを知り

「あ、そう」とあっさりと頷くようになった。

いわく、「遮断魔法は法式に組み込まれた魔力以外を遮断しますから紅尚書など一定の方々を除き、私が魔法を解かないと入ってこられないのです。そもそも魔王さまの御身を考えると魔法は施したままのほうがよろしいでしょうし、逐一法式を解くのも煩わしいので」という台詞に安堵したらしい。

最後に本音出ちゃってるううう！と思わず盛大に突っ込みをいれたが、けろりとして何のことでしょうかと知らぬ存ぜぬを今でもなお貫きとおしている。

ヤパンジ王国、北東部ツカイトウホ。

極東に位置し、一年中ほぼ雪に覆われた領地である。

そのため農業地帯となることはできなかったが、国内屈指の炭坑地帯として栄えることとなった。地域柄、力強く忍耐に優れた民が生まれるためツカイトウホは屈強な兵士を輩出することでも名が知られている地域だった。

しかし活気に満ちていたツカイトウホはある日を境に炭坑利益を牛耳られてしまったのである。だが勿論彼らだっておめおめと利権を渡したわけではなく抵抗を試みた。

しかし相手が何者であつたか判明した途端、雇っていた傭兵隊のみならず国軍ですら手に負えぬとして武器を放り捨てたのだ。

そうして繁栄を築いていた面影はすっかり消えさり民衆は少ない食糧を奪いあわねばならないほど困窮に喘ぐようになった。

――数日前までは、であるが。

そう、数日前まで困窮極まりないツカイトウホであつたがいまは街中で朗々とした活気に満ちている。

子どもたちは我先にと表を笑いながら走り回り、母たちは近所で集まりあい話に花咲かせあつた。店主は埃をかぶっていた店や崩れた瓦礫を大掃除し、早速店を開き賑わいを呈していた。

無論、男たちは肩に道具を背負い炭や泥で顔中を汚しながらも働く誇りを取り戻しつつある。

そんな慌しくも嬉しくある中、ツカイトウホのとある宿屋の周辺はひっそりとした雰囲気包まれていた。

賑わいの渦中でひっそりとしたそれは異様であつたが、なんてことはない。誰しもが宿屋周辺を通るとき音を立てぬように渡るからだ。

姦ばしくお喋りに興じていた女たちは、口を閉ざしゆるり微笑みながら宿屋へと視線を向け、走り回っていた子どもたちも注意しあう

ように唇に人差し指をあてそろりと横切って行く。

——それはツカイトウホの住民の感謝の意味でもあった。

六大悪魔の一人して君臨していた『裏切り者』^{トレイター}を葬り去った勇ましい者一行に対しての。

一行が宿泊している宿屋の窓から、青く澄み渡った空を青年は寝ぼけ眼で見上げていた。

空とコントラストを成すような夏の太陽のような燃えさかる赤い色の髪をくしゃりと掻いたと思うと、糸が切れたようにベットに倒れ込んだ。

それと同時期、中界にて——

連合国のとある王城の謁見室にて王を中心に国の重臣たちが額をつきあわせていた。その顔に浮かぶのは諦めの色。

目の下にこさえられたクマが色濃く疲れを表していた。

「王様、やはり見当たりません」

「それでは、あの報告は事実であつたと・・・そう申すのか」

一段高い座席に腰掛けた王は喉を震わせ大儀そうに背もたれにもたれ掛かると皺が寄った手で顔を覆った。絶望感に打ちひしがれた空気が謁見室を呑み込んだ。

「なんということだ・・・」

悔しそうに唇を噛みしめる者もいれば、諦めるしかあるまいと苦渋に満ちた顔で開き直っている者もいた。しかし、ふいに影から現れた諜報部より報せを受けた宰相が弾かれたように声をあげた。

「されど我が君。我々の希望がただ一つだけ、残されております！」

「・・・希望と？」

「はい」

動揺がその場に走った。希望なんてあるはずがない。

そう分かっているのだが、力強く頷いた宰相にドキリと心臓が走狗するのはいたしがたなかった。諜報部の者は既にその場にはいない。

——このとき、中界には『ツカイトウホの奇跡』として彼の存在がひっそりと認知されはじめていた。

後の歴史書にはこう紡がれる。

——六大悪魔が末端『裏切り者』トレイターに苛まれし彼の領地ツカイトウホ突如とし現れた輝く太陽 白雪を照らし、剣を振り上げ虚言打ち負かす。

人々、太陽を身に纏いし彼の者を、勇ましい者と呼び讃えた——

瞳を揺るがせながらも縋るような視線を一身に背負った宰相は身を乗り出しこう言った。

「希望の名を、勇者と申します」

語らい

コウモリからの報告では、勇者一行はトレイターを倒したツカイト
ウホにおいて一人パーティの数を増やしたそうである。

やっぱ予想通り仲間をゲットしやがったなこのヤロー。

そりゃもう予言するまでもないくらいに100%大当たりっていう
感じで分かってたけど！

もうマジで誰か魔王の味方についてくれよ頼むから。

くそれいけ魔王さま！く

執務を終えてクルミと夕飯と一緒に食べ、ちよつど一服している所
だった。

「で、クルミはどこから来たの？」

「中界だよ」

「いや、知ってるから。それは流石に知ってるからね！」

前に市場で買った葉を使った紅茶を振るまい品よく口をつけたクルミに盛大に突っ込みをいれる。

中界から来たのは知っているが、私が聞きたいのは出身地と住所だ。けれど先ほどからひたすら堂々巡りを繰り返していたため、がつくりと肩を落とした。

クルミは天然なのか策略家なのか判断が付きにくい。

胡乱気な表情を浮かべてみても、ふわふわにこにこと笑みを向けてくるだけである。

うんざりとも言うように長い溜息を替わりに吐き出し紅茶を口に含んだ。

ふわつと柑橘系の香りが鼻を通る。

「もう本当に困るんだってば。城勤めの魔物たちならまだ対策の取り用があるけど、各領地とかもちろん城下からだって色んな魔物たちが出るの。その時にクルミを私が庇ってあげれる保障もない」

さらにいえば自信もないし、こちらの立場だってある。魔王が人間を保護してるなんて広まってみる、頭の固い元老院の狐狸共が黙ってないぞ。

「だから早く元の場所に帰したいの。分かる？」

子どもに言い聞かせる大人のように理路截然とそう言うと、クルミは困惑やら悲しみやらを瞳に浮かべふりと長い睫毛を揺らし机の上に視線を伏せた。

しゅんとした感じが、子犬が怒られて耳と尻尾を垂らしているようにしか見えず、なんだか罪悪感に苛まれた。弱い者虐めをしているようだ。

思わずごめんと呟きそうになったが別にこちらは間違ったことを言っていないことを思い出し、ぐっと口を噤んだ。

顔を伏せたクルミをじっと見据えながら、素直に従順の意を示してくれることを願う。

沈黙の気まずさを紛らわすために紅茶をちびちび飲み、カップの底が見えた頃にゆっくりとクルミが顔をあげた。思わずぴくりと肩を揺らしてしまう。

なぜなら雰囲気をはきずるようになり悲しみやそれに似た色を帯びていると予想していた瞳に静けさに満ちた理性の色が表れていたからだ。

——日本じゃ滅多に見られない真っ直ぐな意思。

……飲み込まれそうで少しだけ、怖い。

「今回の誘拐事件はまだ解決していないよね？ そうだったらクルミを帰したら手がかりなくしちゃうんじゃないのかなあ？」

「でも、クルミだけじゃなくて他にも被害者はいるよ。その魔獣た

ちに聞けば・・・」

「だけどあ・・・、」

クルミはきょとんと首を傾げた。

「人間の被害者はクルミだけだよ？」

子どものように、口を尖らせるクルミに夕食前、コウモリで届けられた紫からの情報を思い出した。

——名をクルミと言い、好きなものは甘いもの。嫌いなものは苦いものと部屋にこもること。愛らしい顔をしており、性格は今の所は天然で怖いもの知らず。子どものように我を通す所があり、頑固である可能性が高い。

さらに核心性を僅かにでも伴う質問に対し、上手く避けた答えを返してくる。見解として、知能指数は高いと考える——

なるほど確かに天然だけどバカじゃない。

ここで、クルミを直ぐに帰すとなると中界から内界への誘拐犯のルートを特定するのは難しくなる。もともと今回の事件でもっとも重大なことは、中界の人間を巻き込んだことだ。

誘拐したルート、方法、理由。全てにおいて被害者の存在以外は謎のまま。

手探り状態の今このままクルミを手放すのは確かに得策ではない。とはいえ、クルミたちを保護した時に犯人たちを拘束してはある。

しかし実際に彼らが、実行犯なのか見当がまだついていないのだ。

こうなつたらもう仕方ない。同じ轍を踏む訳にはいかない。二度あることは三度あり、仏の顔は三度までとも言うがここ（この世界）の常識だつたら二度めで仏が般若になるやもしれぬ。

そうするくらいなら委細が判明するまで保護しとくに限るだろう。

私は考察に推敲を加え、かちゃりと音をたててカップをソーサーに戻した。

「事件が明らかになるまでだからね」

「本当!？」

本当は嫌なんです、という色を隠さずもせず渋々と零すと、クルミは瞳をぱあああと輝かせソファーから飛び跳ね、机越しに抱きついてきた。急なことに目を白黒させて、ぎゅっと回される腕にギブギブと喚きつつも、ふいに――

クルミの行動が、日本にいたときの友達にあまりにも似ていて。

ふわりと、秘やかに蕾が霧のなかで綻ぶような。

蝶がやすめた羽をふるわせるような。そんな小さな、変化だけども。

思わず、溢れかえった優しい懐かしさに真一文字に結んでいた唇がそっと緩んだ。

—だけど、・・・

ある日、なんでもない、ふとした瞬間に気づいてしまったことがある。

日本にいた頃の記憶を、思い出せば思い出すほど。懐かしく優しいだけのそれは、手の届かない今となってはどうしても——

日本の記憶を思い出して笑った最後の日からいったい、どれほどの時間が経ったのか。視界を染める胡桃色のカーテンのなか、どこか遠くでそんなことに思いを巡らした。

「で、いつまでくっついてんの。離れなよ」

「えへ、もうちょっとだけ！」

肩口に顔を埋め甘えるクルミに、私は聞こえるようにあからさまな溜息をついた。

語らいの裏でそれはおこる

暗い暗い檻の中。

ぽつんぽつんと天井から水が滴り落ちた。

そこには男がいた。

壁に括り付けられた浅黒い腕から伝った血が止めどなく雫を成していく。

空を仰ぐように伸ばされた両方の掌には鉄の杭が打ち込まれてあり、血と汗にまみれた身体は最早弛緩し、頭をぐったりと垂れていた。

しかし、ふいに血の気の失せたその男の頬にそつと白い手が添えられた。

動く余力も残っていない男だったがうつすらと眼を開くと、銀の瞳と視線が交錯し、思わずひっと息をのんだ。

銀色の瞳に浮かんでいる色は何もない。そこに見られるのはただ冷たさだけだ。

その瞳を恐れるまでならよい、恐れて、怖れて、そして。

男は言うわけにはいかないのだ。言っただが最後、その先はなんとなく予想がついていたから。

閉ざした唇を噛みしめる男に、緩やかに閉ざされた口唇が動く。

「まだ、話す気はないのですか？」

「・・・はっ、っつ、・・・ねえなア」

男が痛みに呻きながらも否を述べると、銀は口角をつりあげた。酷く満足そうに。

けれど偶然その一瞬を垣間見た紅は、くすりと小さく笑って誤魔化すように髭を撫でた。傍らに従う薄紅は淡々としつつもそっと瞳を伏せている。

ふいに見下ろしていた銀が膝をつく、遅れるようにしてふわりと外套が舞った。

するりと柔らかな銀の掌が男の頬を優しく撫で上げ傷に指を這わせる。まるで傷を癒やさんと。そして子を慈しむ母親のように微笑む。

血が匂い立ち、痛みや疼きに支配されるこの狂った牢獄のなか、男は震えた。震えざるをえなかったのだ。

彼にとって、己が握る情報を漏らさぬように口を割らないのが何に変えても重要なことであり、そして同時に正解であり義務であった。けれど、混乱した。杭に打たれ、苦痛にのたうち回ることすら出来ないこの状況で口を割らぬ自分が可笑しいのかと。

いや、そんな筈はない。これが最善なのだ。だとしても。本当か。そうだ、その通りだ。いいや。けれども、かえって。しかし偽はどれだ。何が正しくて何が正しくない。正しいのはどこにある。あちらか、そちらか。しかし。それとも……。

男は喉を詰めた。

恐懼に満ちた地獄のような牢獄で、あまりにも銀は異色であった。恐怖を優しく綿で包み込むような、そんな正反対の色。

森を巡る水のように、潤す水への思いを馳せた森のように。

差し伸べられた手は、菩薩が気まぐれに垂らした一本の糸か。しかし、あれは縋る者も縋らざる者も、誰も救いはしない糸。

「こちらを見なさい」

ふいに紡がれた銀の言葉に誰が従うかとも表すように反らした視

線を彷徨わせた。しかし反逆の意思を見せた男に、頬に添えていた手を滑らせ、なめらかな所作で男の顎をすくいあげ、見下ろした。

褐色の首の筋がぐいと伸びる。

くたりと冷たい床に放り出している足で蹴飛ばそうともがくが、もはや、男に残っているのは気力だけであった。銀にとって男の抵抗は、そこらを飛んでいる羽虫と同じであつたが羽虫は羽虫なりに彼の機嫌を損ねることとなる。

眼を細めると同時に顎の下にまわしてあつた親指はそのままにし、骨に沿って頬まで添えられていた指先で男の褐色の肌にぷつりと爪先を差し込んだ。

つうと重力に従い頬を伝つて赤が落ちていく。

痛みはある筈なのに眉を顰めただけに終つた男の表情を見てゆるりと肩をすくめた。

長時間かけて熾烈を極めた拷問に痛覚がもはや鈍っているのだろう。けれども痛みを感じない訳ではない。痛みに意識を失いかけていただろう瞬間、傍に立っていた紅が糸でも引くような小さな動作をすると、ぼやけて遠のいていた痛覚が鮮やかに甦つた男は声を荒げた。

——痛みか、悔恨の叫びか、それとも慟哭なのか。

ぐわんぐわんと牢獄のなかで声が響く。

「さあ、眼をあけて下さい」

「……の、っうア、……ク、ソったれ」

「……まったく呆れるくらいタフですね」

肩を竦めたと同時に優しさに満ちた雰囲気がるで幻影だったかのように消え失せ、いつものように冷めた空気が銀を覆った。

溜息を一つつき、爪を立てたまま手をひく。

小さな呻き声を背景に背後に立つ紅と薄紅を一瞥する。

「だから貴殿を呼んだのだよ。得意とする所であろう?」

「紅尚書に言われたくはないですね。こういうのはあなたの仕事でしょうに」

「まあ、そう言ってくれるな。銀殿も確認したいだろうと思ってこちらで計らったのだから……おや、危ない危ない」

銀との応酬を繰り返していた紅はおどけたようにもう一度なにかを手繰り寄せる所作をすると、頭を垂れていた男がぴくりと跳ねる。

最近の若いのはいかな、忍耐力がないと紅が笑う。

「その話はここまでにしましょう。そろそろ魔王さまが御夕食を終わらせますので」

「分かった分かった。では、頼むぞ」

紅の後援を受けるような形で銀はまた男の顎をすくいあげ、頬を撫でると流れ落ちた血が跡を追って頬に絵を描いた。

「最終宣告です、よくお聞きなさい」

べたつく血液に眉根を寄せつつも、男の耳元で月影に潜む悪魔の如く囁く。

ひんやりとした吐息が男の耳朵を震わせた。

「眼を開きなさい。さもなくばその目蓋、切り取ってさしあげましょう」

そう、これは脅しである。

闇の世界で生きてきた男はすぐさま裏の意味に気がついた。

——目蓋を切り落とせば眼球はむき出しになり、否応なしに眼は合うこととなる

昔、目蓋を切り取られた者を男は見たことがあった。

飛び出た眼球にぎよりと回る虹彩。

時と共に涙は止まり、そしてそのあとは・・・

男は余りの身も蓋もない残酷な光景に思わずとでもいうように瞼をこじ開けてしまう。その刹那、視界一面が銀色に覆われたかと思ったら、瞬間、意識が遠のいた。

「私の問に答えなさい」

ゆらりと揺れた陽炎に影が揺れる。

四肢が弛緩し身動きを止めた男を上から見下ろし、君臨者のように投げかけると碌に喋りもしなかった男がゆったりと銀の言葉に鷹揚に頷いた。

とすると、ぱちぱちと気の抜けた拍手が響く。

「流石、銀殿の『魔眼』は違うな」

「紅尚書の『眼力』にはかないませんよ」

「いやいや、謙遜することはない。『眼力（私の）』は相手を萎縮させるしか能がないのでな」

「刑部の長官、刑部尚書として一番お似合いの能力ですよ。コウモリ、此方へ来なさい」

声に反応して牢獄にぶら下がりながら沈黙を保っていたコウモリたちがざわついたが、二匹が黒い羽を広げ銀の肩にちよこんと止まり首を傾げた。これらのコウモリは録画音声機能を備えるハイスペックな魔物であり、内界ではあらゆる場面においてとても重宝されている。そう、今回のようなときにも。

コウモリの瞳が光る。

「調書を作成します。男、以下に答えなさい」

手始めに名前、出身、魔物の種類など答えさせ男に関する一応の情報を得る。

そしてそろそろ良いだろうとのことで、今回の事件について尋ねた。

「捕えた魔獣をどうするつもりだったのですか」

「・・・売ル」

「どなたに？」

「コロ、シウム」

「・・・コロシウムだと？」

虚ろな瞳でぼんやりと口を開ける男の言葉に銀ではなく背後の紅が反応を見せた。ブーツの音を響かせ男に近寄る。

「コロシウムは閉鎖されている筈だ。一体どういうことだ」

「落ち着いて下さい紅尚書。『魔眼』が『威圧』と『眼力』で解けてしまいます」

コロシウムという単語に若干の苛立ちを見せた紅を銀が嗜めると紅は押し黙り肩を竦めた。

歴の將軍の威圧は並大抵の威力ではなく、周囲に影響を与えないため繊細な制御が必要となり、時折、小さな感情の揺らぎさえその制御に影響を与えてしまうのだ。

「だが、コロシウムは倫理的問題で幾百年も昔に禁止されていると聞いている。そもそも、その存在すら二代目魔王さまが国辱として封印したということだが・・・」

老獪な顔を怪訝に顰め、牢獄の薄暗い篝火のなか血のような紅色の

瞳が浮かび上がり男を射抜くが、もはや男は魂の抜けたマリオネットと同じ。何の反応も見せず静かに呼吸をするだけである。

銀もなるほど、と納得した。

彼もコロシウムという単語を今まで聞いたことがない。二代目魔王は歴史上もつとも善政に長けた者であったと聞く。その二代目魔王がそれほどまでに隠そうとしたもの。

中界の人間の話しいてはクルミのことを次に聞き出そうと思っていたが、紅のただならぬ様子に優先順位を変更し尋ねた。

「そのコロシウムはどこにありますか？」

「・・・コロ、シウム　ハチ」

——・・・ぼこり

気泡が深い海の底から浮かび上がる音。

突如として静まっていた魔力がざわつき——

瞬間、銀は素早く身を引き両手を宙に突き出し、——

——ドオオオオオンと巨大な爆発音と突風が牢獄を引き裂いた。

語らいの裏で 続き

蠟燭の先端がぷすりと音を立てて白い煙をくゆらせて転がっている。そのなか、がらんころんと散らばった瓦礫を蹴飛ばしつつ銀は立ち上がった。

けほ、と一度 喉を整えつつも周囲にざっと視線を走らせる。

「これは驚いたな。自爆するとは」

「主、お怪我はございませんか？」

「ああ。問題はない」

紅の前に立ちはだかる薄紅の手は腰元の刀に添えられており、かちんと鞘に刀が納まる。

爆発の一瞬で紅と男の間に滑り込み爆風を腰元の刀で相殺したのだろつ。先導警士としての役目を果たしている。

紅の無事を確かめた薄紅は一步下がりが彼の後ろに控え、こちらを見た。

「貴殿は大丈夫か？」

「ええ。しいていうならこの牢屋が大丈夫ではありませんけど。工部に掛け合って直してもらつことをお勧めします」

ぱたぱたと外套を手持ち無沙汰に叩き、むわりと漂った鉄とアンモニアの噓せ返るような臭いに閉口した。

壁一面、四方八方に飛び散っている肉片。

銀はおもむろに足元にちぎれ飛んでいた肉片に人差し指をあて眼を閉じる。

指先から伝わる魔力。氷水のようなそれは指先を通って腕まで這い上がったと思っただけならすぐさま霧散した。

チツ、と心のうちで舌打ちする。

「予想通りですがこの僅かな魔力では追尾は不可能です。ものの見事な自爆ですよ」

「自爆をするならもっと早くできた筈だ。そう考えると先ほどの男は魔術をかけられた方か？」

血の海のなか、誰も顔色一つ変えることなく推理をしていく様子は異用であつたが魔族である彼らにとって血は忌むべきものではない。むしろその逆。心地よく感じるほどだ。とはいいつつ鼻をつく腐臭は我慢し難い。

「禁術を己にかける痴れ者など数名を除いて普通はいないでしょう。そして、自爆のキーワードは・・・」

「コロシァム、だな」

「ええ。コロシァムの内容に関する発言をすると魔術が自動で入るようにしてあったのでしょ」

冷めた眼で崩れ去った牢屋を見回し、肩口のコウモリの頭を優しくなでた。

「魔王先導警士内界最上級政務官、銀から魔王城研究所所長へ通達します。以上の映像を早急に検証し、報告して下さい」

そこまでいい手を離すと、肩口に止まっていた二匹のコウモリが同時に飛び立ち、薄暗い通路の奥に消えて行った。血に濡れた指先をこすりながら銀は背後を振り返って問うた。

「それで？あなたは何故そこにいるのですかコーラル」

「あれまー、バレてましたか」

声が響くと同時に牢屋の扉付近に、すんと音を奏でず男が現れた。簡易な炎魔法で照らされた色はオレンジ色。珊瑚の、コーラル色。細かく何本も編み込まれた髪は一つにくくられている。

頬をかきながら「さすが銀の旦那ア」とおどけたようにへらりと笑

みを浮かべていたがサングラスの奥に隠された瞳は少しも笑んではいなかった。

「あなたには任務を与えていたはずです。任務放棄と受け取りますが良いのですか？」

「ちゃんと部下に任せてきましたってば。ていうか、そもそも魔王さまの先導警士は銀の旦那なんだからさー！」

減給だけはマジ勘弁！

コーラルは冗談半分に軽口を叩きながら足を踏みだし、紅の横を追い越そうとしたがその一瞬警戒の色を見せた薄紅に気がついたのか、一度目をぱちくりとさせつつも「お仕事お疲れさま」と肩を叩いてすり抜けていく。

そんな様子に銀と紅が人知れず眉を顰めたが気づかれる前にそれも解かれた。

「なにか問題でもあったのですか？」

「いえ。まあ、あえて報告するならクルミっていう嬢ちゃんの部屋から自室戻りましたよってことぐらいですかね？ああ、あと魔王さまそろそろ休みあげた方が良いでしょうよ」

「・・・そっいう根拠は？」

「最近普通に歩いててもあっちにフラフラこっちにフラフラしてて

本人気がつかないうちに身体にガタがきてんじゃないかと」

「人間という種族は私たちの想像以上に脆い。一度くらい休みを与えた方が良くかもしれんな」

「紅の尚書の言つとおりですよ。人間なんですから」

紅の賛同に頷きつつも、魔王の真似をしているのか、おどけたように千鳥足で足踏みをしながらの助言に紅尚書が言つのならばと銀も耳を傾けた。

中界、とある栄えた街。宿屋にて。

太陽のような燃える赤色の彼はいた。勇ましい者を冠した彼である。その彼の隣を彼と同じ位の年かさの青年が些か興奮した調子で彼の顔を覗き込んだ。

「まっさか王さまから直々に依頼されるとは思わなかったな」

「僕もだよ。支度金とかもらえるなんて思ってなかった」

「だよな」。とはいえ依頼が依頼だしなあ。まあ、ツカイトウホの勇者さまなら何とかなるってそりゃ思うだろうけどよ」

「なんとも言ったけど、あれは僕だけの力じゃないよ。リヨクや町の皆がいたからなんとかなったんだ」

「はは、謙虚だなセキ！」

けらけらと笑う緑色の髪の少年、リヨクに彼、セキは苦笑いを零した。なんと言つてもものりくらりと爽やかに笑ってかわすリヨクにセキは振り回され続けている。

相手が年下にも関わらず、だ。

街の出店で買ったパンにかぶりついた。瑞々しいサラダのあとからスパイシーな肉が顔を出し肉汁で口内を溢れかえさせ、あまりの美味しさにセキは顔を綻ばせる。

「魔物に囚われたお姫さまなんて、どうやって見つけりゃいいんだろうなあ」

ベツトに腰掛けながらパンを食べつつリヨクがそう零すとセキも顔

をあげリヨクを見た。真っ直ぐな赤色の瞳に、そういえば例のお姫さまとセキは許嫁だったっけ。王城で知ったセキの交友関係の広さに仰天したのを思い出し顔を顰めた。

「大丈夫。見つけてみせる」

「見たこともないくせに簡単に言うなあ」

指についたタレをぺろりと赤い舌で舐めとりながら軽口を叩くと心得ているのか、ふわりと笑ってみせた。

子どもを嗜めるような柔らかさに満ちたセキの笑顔に弱いリヨクは一度肩をすくめパンの紙包みをくしゃりと丸めてゴミ箱にベツトの上から放り投げる。

カーブを描いて見事に命中。

「あーはいはい、俺が悪かったって」

「なにが悪かったんだ？」

「んあ？」

唐突に話に割り込んできた声の音源に、リヨクが首を傾げた。セキも、もそもそと両手でパンにかぶりつきながら、きょとんとしたのが、ぱあぁあつと顔を輝かせた。

彼らの視線の先には、扉にもたれかかった青年がいた。緩やかなパ
ーマがかった茶髪が横に流されているが、二束ほど前髪が右目にか
かっている。するりと形の良い鼻筋や垂れた眼など、女遊びな雰囲気
を醸し出していたが見目は良かった。

彼は軽やかに部屋に足を踏み入れリョクの向かい側、つまりセキの
隣へポスンと腰を降ろし笑った。

「ブラウンか!？」

「いやア、久しぶりだなあ、 트레이ター倒した以降ぶり？」

「いやア、久しぶりだなじゃねえだろうが！急に姿消しやがっでど
こ行ってたんだよこの垂れ目！！ちよ、セキもなにほのぼの手えふ
ってんだ！ああ、ほらこぼれた！」

もそもそと咀嚼しながら久しぶりだなとでもいうように片手でブラ
ウンに手を振っていたセキを案外口煩いリョクは見逃さない。ツカ
イトウホの勇者となつたのに驕らず相変わらずのセキの様子にブラ
ウンは笑った。

「まあまあ騒ぐなつて。俺たちは結局このあと魔物に攫われた姫さ
ん助けに行かなきゃなんねえんだろ？なら情報集めにうつてつけの
良い場所がある」

「なんでブラウンがそんなこと知ってんだよ」

「いやあ、だてにふらふら流浪ってるわけじゃないからな。で、どうする？行くのか、行かないのか？」

胸をはって威張るブラウンにそういうことじゃねえんだけど冷たい視線を送っていたリヨクだったが、ブラウンのあつけからんとした態度に毒気を抜かれセキを顎でしゃくりブラウンの矛先を向けた。

「どうすんだセキ。リヨクはアンタに従うみたいだぜ」

「もぎゅ もぐもぎゅぎゅ？」

「この街の地下だぜ」

「おまつ、今の分かったのか？」

「いや、勘だ！」

「勘かよ！！」

腹立たしさにブラウンのみぞおちに裏拳を叩き込むリヨク。あつけからんと笑顔を浮かべてた二枚目ブラウンがごふつと奇声を発してのを見下ろして「ふん」と鼻で笑うがパンを食べ終えたセキが口元をティッシュで拭きながら、へえ、ここの地下にあるんだ。と零す所を見ると、あながちブラウンの勘は外れていなかったことが分かる。

「それでブラウン、その情報集めにつつてつけない場所が地下にあるってことは分かったけど、なんなのそこ？」

「い、異種族入り、乱れ・・・た闘技場、コロシウムだ」

パンの包み紙をゴミ箱へ捨てにいきながら、問うたセキに待つてましたといわんばかりに顔をあげてニカツと笑ったが、腹にきまった痛みによって引き攣った笑いになっていた。

見た目は女つたらしの二枚目に間違いないのに、中身はどこか可哀想なヤツなんだよなとリヨクは思いつつブラウンを見下ろした。

「コロシウム？なんだそれ」

「さあ？俺もよく知らねーんだよな」

リヨクに尋ねられたブラウンは知らねえとあっさり白旗を振ったが、でも、と続けた。

「ワインレッドが、今度その大会に六大悪魔が参戦するって言うてたぜ。だから結構の魔物やら人間やらが集まるらしい」

「はあ！？六大悪魔ってあのトレイターと同じくらい強いやつってことだよな・・・なんでそんな奴が参加するんだよ」

「まあ、俺らはそれを横目に集まってくる魔族連中に情報収集すりゃ良いってわけだ」

ぎよ、と目を見開き驚いているリヨクに垂れ目がちな瞳をやんわり緩ませてからからと笑ってみせたブラウンにセキがベツトに腰掛けた。

「いまほとんど手がかりがない状況だし取り敢えず、行ってみよう。そのコロシアムに」

前向きなセキの決断にブラウンがそうこなくっちゃ面白くねえな。と拳を握った反対側でセキが決めたなら俺はそれに従っただけだとりヨクは頷いてみせた。

白と蛍光黄色のコントラストって目に痛いよね

クルミに解放されたのち、自室へ戻る途中で銀に捕まった私はふつわふわなベットに潜り込むことなく、なぜか執務室で怒涛の勢いでひたすら書類に魔王印なる判子を押しまくっていた。

ああ、朝日が目に眩しい……。

執務室の椅子に座りながら一夜を過ごした私の眼下にはくつきりと鮮やかな隈が刻まれていることだろう。真紅のカーテンの隙間から射し込む光に言い知れぬ哀愁を感じ、机の縁に頭を付けながらも判子を押す手を動かした。

次の用紙へと手を伸ばすが宙をかすめ、淡い期待が働かない頭の中にぼんやり浮かび上がる。

「お、おわり……？」

予想以上に低い掠れた自分の声に驚きつつも力を抜くと、一夜中手を休めることなく黙々と働いていた銀が肯定したため、ようやく終わったああ！と今度こそ全身の力を抜いて机にもたれかけた。さながら糸のきれたマリオネットであったことだろう。

（寝る。もう寝る……！）

それは自己催眠に近かった。本当はベットで眠りたかったが最早望

むまい。瞠目した途端にふわりと蕩ける蜂蜜のように溶けそうになった意識に従うまま手放そうとして。

——こんこん

けれど扉を叩いた音に敢えなく引き戻されることとなった。

「・・・魔王さま、ベールを」

「くそ死ねくたばれ誰だ消えろ」

もう眠ろうとした瞬間で、むふふとつつとりしていたのに。

ぎりぎりと悔しげに歯を食いしばりながらベールをかぶると、開いた扉から眼に痛い蛍光黄色がキラキラと笑顔を振りまきながら入ってきた。

思わずベールの下でげんなりとしてしまう。

ヤツの髪と瞳が蛍光黄色で目に毒だけでなく――本当にショッキング・イエローだ――ナルシストのように浮かべられた笑顔が何とも腹立たしくて胃の辺りがギュと縮小する。纏っている医者が着るような白衣が蛍光黄色をさらに眩しいものとしている。

なんの効果かは知らないが彼が笑顔を浮かべるたび、キラキラと光

の屑が舞いさらに目の刺激が半端ないものとなる。前、彼の横を通ったとき、しゃららららんとという効果音がしたのは気のせいだと思いたい。

一応、いちおうだ。大事なことから二度言った。美人さんなのに、なぜ中身はこんななんだ。見た目だけで判断すればマダムキラーとか言われるのは理解できるが、なぜ中身がこんなのだ。まあ中身を考えるより私はこいつのこのナルシストオーラに反吐が出そうなのだが。

「やあやあやあ！ご機嫌麗しいかな？ふふ、大丈夫。僕は昔も今もこれからもこの麗しさを保っていくからねっ」

「………黙れ」

あまりのテンションの高さに、睡眠不足も合間って苛つきを隠すことなく言う。

さらにこいつ、

魔王城研究所所長「キ・イ」本人は「イエローと呼んでくれよ？」とウインクを飛ばしてくる―嫌でも呼ばん―は、おやあ？と大袈裟に頬に掌をあてて首を傾げた。

おい、お前の頭上にハテナマークが浮かんでいるが、それは何だ。しょぼついた私の目が作った錯覚か。

「どうしたんだい魔王さま？そんなに苛々してちゃお肌に良くないぞ」

そう言つてキ・イは、ぱちこーんと再度ウイंकを飛ばした。同時に星の塊がとぶ。眼の錯覚ではない。本当に飛んでいるのだ。

ふよふよと近寄ってくるなんだかポップな星が私に届く前におもむろに銀がぴしゃりと叩き落とすと星が空気に溶けて消えた。もうなんなのマジで。こいつのテンションついていけないわ。いつも思っていたがこいつマジでうざい。うざキャラありえねえ。

肉体的な疲労に精神的な疲労が重なり、もう部屋に帰つて寝るのが一番だと立ち上がるうと腰をあげた瞬間、ふらりと目の前が真っ暗になった。とつさに机に手をつき耐える。

（――・・・目眩か）

しばらくじつと脳天を搾られるような奇妙な感覚に耐えると目眩はすつと消え、ようやく今度こそ椅子から立ち上がった。

「部屋に戻る。あとは勝手にしろ」

そう吐き捨てて掠れた低い声に喉をさすりながら水でも飲もうと執務室を出ろつとした刹那、

「アッハ！魔王さま今のとってもエロティックなんだぞ」

との気持ち悪い台詞のあと「解剖させて欲しいなー」との声を背後に受け、おぞそたとたつ鳥肌を宥めながら瞬歩で長い廊下へと避難した。

キ・イは興味を持つとことん突き詰め解明したがる学者であつたのでまあぶっちゃけ面倒なのである。一度でも彼の好奇心を刺激するとほんとに、もう、ねえ？

ありとあらゆる方法を用いて対象をこれでもいうかというくらい穿り回し、切り刻み、その身に隠匿していたもの全てを白日の下に晒すのだ。

同族の悪魔を張り付けにしてうつとりとした表情で切り刻むキ・イの姿を見たときちょっとトラウマになった。いや、ちょっとどころじゃない。だいぶトラウマになった。

たとえその対象が生きていて。守るべき家族や愛しい恋人、養うべき子どもが居たとしてもキ・イは心にとめることはない。いや、むしろ目すら向けようとしない。なぜなら、答えはただ一つ。

——彼の興味範囲に入っていないから。

キ・イの中には何の情も躊躇いもないのだ。

食指が動かない対象の過去も未来も、欲も願望も祈りも知っていた

としても。人々から糾弾される悪魔らしい悪魔、研究に恍惚とする悪魔。それがキ・イ。

私は、それを見ていた。

銀たちの剣術特訓から解放された日。

目を背けようとしても、背けられなかったあの日。

この世界はどこまでいっても優しくない世界だと気づいた日。

目の前で息絶えた悪魔の『名』すら知ることとはなく。

——ただ、私は、ずっと震えただけだった

その死んだ悪魔を自分の未来と自然に重ねあわせて。次は、私だと。

だから、キ・イやここの生き物が怖いと思った日。

だから、疑う術を身につけなければならないと気づいた日。

だから日本へ帰りたいと願った日。

（ふわふわしている自分がどうしても、気持ち悪くて。）

だから、魔王という位に縋り付くしかなかったと言い聞かせた日。

——……だつて

（日本がない、知らないこの世界で）

だれも私を守ってなんか、くれないでしょう？——

人工太陽とはいえ朝日が昇って間も無い廊下は窓から射し込む朝焼けにゆつたりと染まり、しょぼつく眼に優しく映る。足音は絨毯が続く廊下には響かない。

偽物だと、分かっているけどそれでも優しい色に満ちている光景を楽しみつつ歩を進めていくと、窓の外から、ちらほらと侍女や下男たちが忙しなく動いている姿が見え思わず足を止めた。

ああいう人たちがいるから、こんな生活できてんだろ？なあ・・・
朝からお疲れさまだなあと感慨にふけりながらほんの少しだけぼんやり眺めて。

（うつわさむ。早くベッドに潜り込もうと）

一方、その視線の先で。

月の光の僅かな光と蝋燭などの光源でも魔物、魔族たちは生活することには何らの不便もなかった。なぜなら元々彼らは人間などに比べ遙かに夜眼が効くからだ。

「よいしょと。えーと、これはあっちか。ああ、おはよう」

「あらおはよう。さっき料理長が呼んでいたわよ。きっと今夜の話だと思っわ」

「さて、花でも生けようかの」

「客間の準備しなくちゃ」

いつも以上に忙しく動き回る彼女や彼らは魔王城に仕える下男や侍女、シェフや庭師であった。

月の光が溶ける内界の空に太陽が昇りかけている。そう、太陽だ。空には月と太陽。魔王城城下に住む魔族たちはようやくこのちぐはぐさに慣れ始めていた。

魔族たちは最初は太陽、とくに人工太陽を打ち上げる意味が分からず前代未聞と言っても良いこの政策はまたたくまに城下にも広がって行った。

魔族たちは上層部の役人や軍部、伝統を重んじる元老院が、拒絶し反対するだろうと思っていたが、予想に反してあっさりと承認されたのである。

今生の魔王さまが政治的手腕に満ちているのかそれとも、今まで表立って動かなかった魔王さまの初めての政策として目溢しされたのかは定かでは無いが、どちらにせよ人工太陽は魔族たちに受けいられた。

根本たる理由は単に魔王さまとなった彼女の太陽への渴望であったが、それをどう受け取ったのか上層部はいたく感動したらしい。

いわく、

「相手を知り己を知る。そしてさらに、相手のフィールドの特徴を

受け入れるとは、なんという心意気・・・感服した・・・!!」

だそうだ。

つまりあれだ、人間たちと戦う前に、中界のダンジョンにかかせない太陽の光に魔族を慣れさせるためだと勘違いしたのだ。素晴らしきかな勘違い。ないはずの奥のおくまで推測しちゃったがための作り上げた虚構。

ぶっちゃけ空気読みすぎだと思うと後々コーラルに教えてもらった彼女はぼろりと零すこととなる。そんな事情があるなか、桶を運んでいた一人の下男がぴきりと凍ったように動きを止めた。

下男に指示を出そうとしてた侍女は凍り付いた彼にきが付き訝しげな色を浮かべつつ視線の先を追ってその先にあるものに同様に凍りついた。

——朝焼けを臨む闇夜の黒。

「魔王さま・・・」

ぼろりと夢心地に落とされた言葉に呼応するが如く、視線の先の魔王がふとこちらを見下ろした。

瞬間朝焼けのもと纏っていた廃退的でどこか掴み所がない色からふつと諦観の色へと変わられた。たなびいたベールの下に隠れるた漆黒の双眼を想像して二人は震えることすらできなかった。そう、震えることすら、できなかったのだ。

恐怖に震えるのが普通だと思っていた彼らは初めて知った。

至高の怖れは、身体の動きを止める、と。

魔王の視界に入ることすら許されない低い身分なのに――幾許の間――その視界に入る。

刹那、ふつと風が吹き抜けたと思うと魔王は身を翻し姿を消した。唐突に身動きをしなかった下男が、視線が魔王の姿を外したのを確認したと同時に、ぷはあっと息を吐き出し肩を揺らした。

「と、遠眼だったけど、魔王さまの『眼力』凄まじい・・・消されるかとおもった・・・あ、ありやあ、ちびる・・・!」

「わ、わたくしも、そう思いましたわ・・・けれど、あの闇色といい纏うオーラ。なんて広大で底しれぬ深さですの・・・まるで、深淵だわ。おこがましいですけど、わたくし魔王さま、彼の方の一部となれるのでしたらこの命惜しくくないですわ」

「は、・・・真つ青な顔で言われても、な」

「お黙りなさいな。あなたこそその足の震えをどうにかしてからおっしゃいなさい」

「は？パーティ？」

起き上がりに、ぽかんと顔をあげる彼女に銀はなんて間抜けた顔なんでしょうとでもいうように眉を一度顰め、水差しの水で満たしたグラスを彼女に渡した。

「パーティではなく茶会の御誘いでございます」

「行かないからね」

ありがとと硝子製のグラスに口を付けつつ首を横にふる。パーティだの茶会だの謀計術数渦巻く所に誰が顔を出すか。いや、顔はベールで隠れてるけどさ。嫁と姑みたいなどろどろした腹の読合いなぞ好んでもしたくもない。

「そうですか。それなら代わりの予定を入れさせていただきます」

「ん。それよりクルミって私がない時になにしてるの？」

「室で紫からこの国の歴史を習っていらっしたり、読書をして過ごされているようですが？」

「うっわあ引きこもりか……。そっか、外に出すと不安要素ばっかだもんね」

ここは広い。広大な土地の一番丘だった所に魔王城は建てられているが軍部や役人、下働きの者達の宿舎や訓練場、広大な図書館に庭。六部の庁など様々な施設が魔王の土地には備えられている。

しかし広いぶん全体に目を通すのが難しく、人間であり内界に慣れていないクルミを外へ出すのは流石に怖い。変態研究所長とかに見つかつたらどうしようとか。

銀が勅令を出したらしいが、それでも人間だとバレてエサ扱いされ追いかけて回される可能性もあることは否めない。それでもと思案する。

「流石に外にちょっとくらい出たいよね……。なんか外にでも大丈夫なことかないの？」

「魔王城の隅にある東塔とかいかがですか？あちらなら滅多に魔物たちも近寄ることもありませんし、一番安全かと思います」

「ああ、あのお城の隅っこにあるふっるい塔か・・・」

もの凄く年代ものの石造りの塔は、魔王城の東隅にあった。塔の外側を蔦が巻き付き――

見して無機質でおどろおどろしい印象を与えるものであったが、部屋の内装は小綺麗に保たれているのを思い出し、まあ大丈夫だろうと首を縦にふってみせた。

「それでは彼女をそちらに移すよう紫に通達を出しておきます」

「ん。よろしく」

残っていた水を飲み干したのを確認した銀はすかさず空のグラスを受け取り机の上へと置いた。

「本日は午後も予定はございませんので、ご自由になさって下さい。ただし私は随行することのできませんので近衛を付けさせていただきます。くれぐれも口調には気を付けて下さい」

ぴしゃりと子どもに言いつける親のような剣幕の銀に、思わずこくこくと頷く。というか護衛なんていらねえの一言を出したいが出せ

ない。

日本にいた頃なんて、夜でも一人でコンビニに行けるくらい治安がいいし、そもそも一般人だったから護衛なんてついたことないので心苦しさがあある。

そんな微妙な心象を感じ取ったのか分からないが銀がもう一度口を酸っぱくさせて言い聞かせてきたが、もう分かったつつの！と部屋から押し出した。

無然としつつも呆れた顔をしていた銀だったが寧ろ呆れたいのはこちらの方である。やれやれと肩をすくめてもう一度ベッドへダイブする。

「今日はお休みなのに外出すんのは止した方が良さそうだなあー・・」

ふかふかの枕に顔を埋め、目を閉じた

のだが、

一日中寝過ぎすのは流石につまらないし時間の無駄だったので意味もなく魔王城を渡り歩

いた。行きたい所もなく単に散歩がしたかっただけなのだがそうは問屋がおろさない、というよりも。

おろさないのは問屋ではなく近衛兵だったが。

あの沈黙はマジで耐えられなかった。思い出すと身体がなんだか重たくなって、はあ、と溜息を吐いてベールと重厚で滑らかな触りごこのマントを脱ぎソファーへと投げ捨て文字通り毛布の中に潜り込んだ。

夜会 1

荘厳な装飾が施されたそこは、酷く大きかった。

圧迫感を感じさせないように天井は三階までの吹き抜けになっている高さである上、見上げると蠟燭の揺らぐ光だけでも繊細な天井絵がよく見えた。

広さも大勢を招待しダンスパーティーを開いたとしても余りあるほどだ。そこは、羽音ひとつなく、しんと静まり返っていた大広間だった。自分が吐き出し空気を吸い込む音が耳元まで届き、耳を澄ませば心臓の鼓動、むしろ皮膚の下でほとばしる血の音さえ聞こえる気がした。

私は大広間の奥にあった2つ段が設けられた所に設置されていた玉座に腰を下ろしている。

身に付けた黒い重厚なマントは裏地が赤くいつものマントだとふいに気がついた。

大広間全体を俯瞰できるそこから、ほの暗い光の中、玉座の遙か前で剣を握った影を見つけたが人影は色も顔も持たない影法師であった。ふよふよと不規則に海をたゆとう月のような影法師。

その身に持つ銀色の剣が暗がりの中キラリと反射して眼が眩む。

眩んで眩んで眩んで。周りが見えない恐怖で玉座から立ち上がり逃げ回ることすらできず。

ただ眩む瞳を見開いてじっと見ている。どこをと言われても、どこでもないと言っざるを得ないなにかを。

じっと慄きつつも、眩んだ瞳を見開いて見ている。

そう、私に向かって剣を振り落としたその瞬間も私は、見て――

「っ！！！」

叫び声をあげそうになった瞬間に、ぱつと目が見開いた。激しい動悸に呼応した荒い息をふあつと吐くと深紅の趣味の悪い色が視界に飛び込んでくる。見なれた天井にシーツ、クローゼットやカーテンへ視線を走らせ確認してから私は首筋に垂れた不快な汗を裾で拭いながら大きく息を吐いた。

「ゆ、め・・・」

ただ見ていた私と振り翳された銀色の剣。

鮮明と蘇る夢の内容に思わず鳥肌がたった腕をこすり深呼吸をする
と身体が和らいだのに気がついた。
どうやらだいぶ力が入っていたようだ。見慣れた光景にふつと安堵
して。

――・・・安堵して？

そこまで思っ
て私は掌で目蓋を覆い隠し、「あー」と意味もなく
喚いた。

肺に溜まった空気を無意味に吐き出し、そしてまた吸い込み意味も

なく喚くを幾度か繰り返し、大理石でできた洗面所で顔を洗いカーテンの傍にある椅子に腰掛け顔を覆った。

「ああもう、なんで安心してんの」

そう、ここは魔王城。私の本当の居場所じゃない。ただの仮初。だからこの光景に安堵したらダメ。

ここに慣れきってしまったら。知らない間に内に入れてしまっていたら、ダメ。

自分に言い聞かせるように何度も口に出して繰り返した。口で、耳で言い聞かせる。まるで、言霊を使った洗脳のようなだと思いきなり不意に笑ってしまったがそれでも私には必要なことだった。

この世界の異物であり続けなければならない。

もしもこの世界に溶け込んでしまったら。元の世界にはきっと、帰れない。

だから私はどんな手段を使っても日本にいた頃の『私』であり続けなければならない。

私は、この世界が創り出した予定調和の外にいる異物であり、運命に定められている未来を崩すバグ、ウイルスであり。

そう、つまり、この世界においての私は――

「たった一つの、エラー」

なのだから。

「それいけ魔王さま！」

紫がクルミをあの古い塔に移したらしい。

あそこは元々魔そのものが近寄らないから、外で羽を伸ばすこともできと思う。前にこっさり見に行ったら紫と内界の暮らしについて真面目に勉強していたから邪魔をしないように帰ったけれど、相変わらず元気そうな様子でほっとした。

背筋を伸ばしていくと顎をひく。

年嵩の侍女頭の悪魔がいつもとは違う黒がかった紅色のマント―闇紅色―を肩にかけ金糸で結われた紐を留め金に何度も巻き付けていた。

裾には柔らかいファーが広がっている。マントと同じ色のファーから視線をあげると、硬くて力が入ってしまっているのか侍女頭の手が白くなっている。

見た感じ初老を迎えている彼女にはこのごてごてした儀式用の装束を着付けるのは大層骨を折る作業なんだろう。おばあちゃんな

のに。しかも一人でやって・・・ちょっと可哀想になってしまう。

ここまで着付けてもらえば後は留め金に巻き付けるだけだし、とはいえこの作業は見た感じ力があるから おばあちゃんにはキツイだろう。でもこれだけの作業なら私にもできるだろう。不格好だったら銀とかに直してもらえば良しだ。

「もうよい」

「も、申し訳ございません。なにか不手際がございましたでしょうか」

紐へかけられた手が離され、ぱつと頭を下げられてしまい私はわたしわたしてしまった。

はるか年上の人に頭を下げさせちゃうとか！！おばあちゃんは悪いことなんもしてないんだよ！

ただなんかキツそうだからもういいよってだけで。誤解を解かなければ！！

「なぜ謝る」

そして真意が伝わるように未だに見つめた。やはり疲れているのだろう。

頭を下げ続け微動だにしない侍女頭の頭頂部は艶やかな白髪で染まっていたが、どこかくたびれたように見えた。早く休ませねばなるまい。

これくらいの年を食うとほんの些細なことでポツクリ行ってしまうかもしれない。

それは後味悪すぎて思わず口元がひきつた。

「兄には最早重荷であろう。さがるが良い。否、さがれ」

そして休んで下さい。

心の中でそう付け足すと、侍女頭は気品ある綺麗な一礼をしてから室を退出した。

肩を落としていた後姿に隠しきれない疲労を感じ心許なくなっていると銀が入れ替わるように室を訪れた。

銀はこちらに顔を向け下から上へと視線を滑らせる。

「御召し替えなされたようですね」

「とかいうそつちもね」

「ええ」

私の言葉の通り銀の服装もいつもの簡素なローブ姿ではなく儀礼用の軍服と薄手ながらも上品な濡れ鴉色のマントを纏っていた。

漆黒の軍服には白銀の繊細な刺繍が散りばめられ幾つものエンブレムが胸元で輝き上品な仕上がりとなっている上、漆黒に銀色はよく映えた。

洗練された着こなしに涼しげな目元が今日はどこか優雅ささえ感じられる。

その目元がふいに私の胸元で止まった。セクハラか、と突っ込む間もなく次いで伸ばされた手は金紐を摘み留め金へとかけられた。あ、黒い手套してる。

「なぜ途中までしか留めてないんですか」

「あー、いやなんか自分でもできるしって思っちゃってもう良いかなあみたいなの？」

私の台詞を右から左に流しつつ銀はマントの留め金に手をかけ次々ととめていった。というか。

「今更だけど、なんでこんな私に着なきゃいけないわけ」

「夜会があるからです」

「・・・ちよつと待てっ！」

ぱつと留め金にかけられていた銀の手をマントから外そうと右手で銀の手首を掴んだ。ぎりぎりと力を込める。

「夜会？聞いてないよそんなの！！」

「お伝え致しましたが？」

「いつ！？絶対言っていなかったよ！！」

「茶会の予定を他に替えると私はお伝えし、それに対して魔王さまも領かれたではございませんか」

ぎりぎり締め上げてるのに顔色一つ変えずにけろりと宣った銀にさらに力が手に籠る。確かに言ってたさ！確かに領いたさ！

「だけど夜会だなんて聞いてないつつの！！」

「確認しなかった魔王さまの非ですよ」

地団駄を踏みつつムキーと喚く私にやれやれと肩をすくめた銀の様子になんとか馬鹿らしくなってしまうた。

こいつにどんな言葉を放つても夜会から逃れる術はもはやないに違い無い。そういうパーティとかを辞退できていた今までがある意味奇跡だったのだろう。

ことあるごとに臣下たちからパーティでくれよ的なこと言われてたし。女は度胸だ。多分椅子に座ってぼけっとしてれば良いんだろうし。そこ考えると大して苦勞も無さそうだと判断し今まで銀の手を掴んでいた自分の手を諦めたように離す。

「魔王さまは玉座に御座りになられているだけで宜しいです。私も先導警士として御側を離れることはございませんし、なにかありましたら此方で対処させて頂きます」

そう言いながら、私の黒マントの金紐を留め金にかけ終えた銀は一步離れたかと思うと全体を確認し満足したのか一度頷いた。

「よくお似合いです」

「似合いたくないんだけど」

間髪いれずに答えてやった。間髪いれずに答えてやった。大事なことだから二度いった。

似合わないよりは似合うと言ってもらいたいが、これだけは気持ちの問題から考えて嬉しく無い。全くもって。

ベール越しにぎろりと睨んでみるが全く効果はないようだ。

効果がないどころか銀は気にもとめずにいつも通りの口調で後で迎えに来きますとだけ言って部屋を出て行ってしまった。

え、私このあと何して待ってりゃいいわけ？

ぱたんと背後で扉が閉じる。

銀は脳内で夜会のスケジュールを確認しながら長い廊下を進んだ。

この階は魔王や上級管理職の執務室など多く集まっているため滅多に魔族たちは通らないが今日はどこか人通りが多かった。とはいえ、場所が場所だから通る侍女や侍男たちは洗練された者達ばかりだったが。

彼らは銀に眼を止めると一様に足を止め頭を下げた。

頭を下げられることが一種のステータスだと考えている役人も中には多くいたが、銀はそういうものには興味がない。

歯牙にもかけず一定の早さで壮麗な廊下を進み何個目かめの階段を降ると一つの部屋に滑り込んだ。

なんてことはない客室で、銀色の瞳をふいに細めたかと思うと、銀はおもむろに手につけていた黒い手套の人差し指の部分を口で咥え脱がした。

手の甲にうつすらと滲む赤い色。やはり、ですか。

「あーらら。やっぱり血出ちゃってますね」

ふいに手元が陰り、顔をあげるとぶらんと編み込まれた髪が視界に入ってきた。コーラル色の瞳は銀の手の甲に刻まれた傷を覗き込んでいる。それをじりと睨めつけた。

「なんのようですかコーラル」

「いやア、魔王さま見るからに爪立ててたからさ。銀の旦那ダイジ

「ヨープかなあって心配したわけよ」

だからそのうざそうな眼で見ないで！

と続けざま宣ったコーラルを冷めた眼でちらりと見てから銀はうつすらと浮かんだ手の甲の血を舐めとり逆の手をその上に翳した。

確かにこの傷はコーラルの言うとおり彼女が夜会に出たくない和金紐を留めていた手を捕まれ抵抗されたときにできたものだ。

普通の感性の持ち主ならば腹が立つ所だろうが、このときの銀は一種の感慨を受けていた。

そう、まるで歯が生えそろえ始めたばかりの子犬がむずがって噛み付いてきた時のように、その成長を。

彼女は人間だ。どこにでもいるような人間。しかし、人間は人間だけれども、異世界のと始めにつく。

異世界から此方へと引きずり込み魔王としての教育を手ずから施した、そんな人間。

ぼわんと温かい光が掌から手の甲に降り注ぎ、ゆっくりと傷が修復されていく。彼女がつけた、傷が。

——私はっ、傷つけられたくもない、傷つけたくも、ない！！

模擬刀を握りしめ泣きながらそう叫んだ彼女。

彼女は毎回、傷を作りながら甘いことばかり言って泣きじゃくっていた。

傍目も気にせず泣きじゃくる姿が年端のいかない子どものようで内心呆れ果てつつも、それを慰めも詰りもしなかった。

ただ、じっと見ていた。泣いて気が晴れるなら。一時でも逃れたい現実から逃れられるなら、好きなだけ泣き喚けばいいと考えながら、どこか自分の奥底にあった苛立ちを押し込めて。

じっと見ていた。ちつぽけで反吐が出るくらい甘い異世界の泣き虫を――

物思いに耽る銀をコーラルが見ていることには気がつかない。

――私はっ、傷つけられたくもない、傷つけたくも、ない！！

素直なことだと嗤ったのは紅だった。

逸らすように瞳を伏せたのは薄紅だった。

じっと見下ろしたのは・・・私。

慮る必要などなかった。否、することができなかった。

慮れば慮るほどきつと自分は、彼女にしたことを悔いねばならなくなることを無意識に深層で分かっていたから。

しかも、それは自分の正義を断罪することと同義だったから。

自分の正義を貫くために彼女を此処に引きずりこんだ。

自分の正義のために家族を捨て、友を裏切った銀は悪役にもなる覚悟をすでに持っていた。

たった一人の人間を切り捨てることなど、もはや造作もない。情より優先すべきは、己の正義――

だから泣きじゃくる彼女をただ見ていた。見ればみるたび、しゃがみこみ震える背中がどうしても小さく見えて。

ふいにそれがフラッシュバックして。

――そうだ……

はっと銀はその一瞬で初めて気がつく。泣き虫な彼女は、

「いつから、泣かなくなった？」

思わずぼろりと口を出た言葉に無意識に口元に手を当てるとコーラルが瞬いて首を傾げた。それを見て自分の失態に気がついた銀が内心舌打ちをして話を逸らそうと画策するまえにコーラルに先手をうたれた。

「え、銀の旦那ってば泣き虫だったの？」

「違います」

「冗談ですって」

へらりと笑みを浮かべるコーラルへ銀色の視線を向けすぐにそらした。

手の甲の傷が完治しているのを確かめ、掌から溢れていた光を消し去り部屋をあとにしようとする身を翻すとコーラルに「ね、銀の旦那」と呼び止められた。

いつもは気にもとめず歩き出すが今回だけ胸騒ぎがして足を止め、振り返ると漆黒のマントが揺れた。

ほのかな月光が射し込む窓を後ろにコーラルの影が密やかに絨毯を陰らせる。コーラルはいつも浮かべている半笑いを引っ込め真正面から銀を見据えた。逆光にもかかわらず煌いて見える真摯な瞳に自然と対峙する。

「俺はさ、銀の旦那の優しさってやつ分からないし、こんな仕事やってつからあんま雇い主と対象者の関係とかに口挟める義理ないんだけどね。銀の旦那はさ、結局どっちを選ぶの？」

コーラルの言いように銀は眉を不快げに跳ねさせたが、その言を止めることはしない。月光射す裏側。逆光による薄闇の中、いつものおどけたような雰囲気か嘘のように消し去しさられたコーラル色の瞳に鋭い何かの光が迸ったようにどうしてか見えたから。

だが、押し黙った銀にコーラルはへらつとサングラスの奥の瞳を緩

ませ笑った。

「ま、どちらにせよ貰ってるお給料分はきっちり影から働かせてもらうから安心してね銀の旦那」

「・・・あたりまえです。これも頼みますよ」

銀は一度息をつき、投げた。

ぱつと漆黒の軍服のポケットから放り投げされた物をドヤ顔をしていたコーラルははしつと片手で掴んだ。

しげしげと見下ろすとそれはピンクの色をした液体が入ったガラスの容器だった。ピンクの液体のなか、こぷりと空気があがってコーラルは小首を傾げてあぁつと合点がいきニヤリと笑った。

「え、なにこのドピンク。あ、媚薬？なに銀の旦那つてば俺にこれ使えっていうこと？俺まだこういうの無くて充分楽しめるのにイ」

「前々から思ってたましたがあなたは品が無いですよ」

「ちょ！男に生まれたからにはそーいう行為を楽しむのが醍醐味つてやつでしょ！むしろ義務ですよ義務！！」

「そのような話を人前するのが品が無いと言っているんです。それと、その瓶の中身は媚薬ではなく自白剤ですから」

「ええ！！」

さらりと言った銀にコーラルはぎよつと顔をこぼわらせ、思わず瓶を持っていた手を顔から遠い所に伸ばし逆の手で鼻をつまむ。

「ちなみにこれ作つたの銀の旦那？」

「いえ。魔女に作らせました。効果はよっぽど私が作るより良いものです」

「うわー。前言つてた通り本当にこんなゲキブツ作らせたわけね。・
・さつてとお給料分さつそく働かなきゃねー」

じゃ、とあつけからんと笑顔で片手をあげたと思ったら客間には銀しか佇んでいなかった。

先ほどの騒々しさがまるで屋気楼であつたかのような静けさだ。

ふつと視線を窓の外へと向ける。

視線の先の窓から射し込む月光は、部屋に闇色の影を散りばめさせてひっそりと柔らかい光を零し輝いていた。銀の足元から伸びた一人分の影に視線を落としたかと思うと、ふいにコウモリが肩に降り立った。

コウモリからは紅の声が響く。どうやらコロシウムで大会がおこなわれるとの情報を手に入れたようだ。聞くにつれ銀の眉間に皺がくつきりと刻まれていく。

「・・・なんて愚かしいことをしてくれただんではないか」

ぽつりと悪態をつきつつ、裾から銀製のナイフを取り出し報告を終え机の上で羽を休ませていたコウモリに突き刺した。

「違法化された遺産の在処を見つけ出すだけでなく、あまつさえ大会をおこなうだとは。やってくれますね」

ギ、と声をあげたコウモリは一瞬でひび割れ、さらさらと砂になって机に零れ落ち形をかえた。人差し指を横へと揺らすと砂になったコウモリの残骸が青い炎で燃え上がる。

コロシウムで大会を開くということは銀にとって酷く腹立たしいことだった。むろん封じられた遺産が与り知らぬ所で勝手に使用されているということが腹立たしさを増させた一つの理由であったが彼の怒りの源にあったのはまた別のものだった。

その源は、いわゆる信念、正義と呼ばれるもの。

それを貫くために色々なものを今まで道端に捨ててきた。そしてこれからも。

それが同族だろうが関係ない。シビアだと言われようと木柵になることだけは許さない。異世界の彼女ですら例外ではない。

もとより地なりを確固たるものとするために魔王さまを言いくるめ夜会へと出るように仕向けていた。

魔王さまが夜会にお出になる。

これだけで夜会そのものに付加価値が付くのだ。つまり日頃、夜会に参加せぬ上級魔族たちも顔を出さざるを得なくなるのだ。理由の如何を問わず魔王城へ登城しない魔族たちも今日こそは来る。初となるお披露目だから。

刑部尚書として極秘に事態にあたった紅の予想通り銀も、封じられたコロシアムを見つけ出し情報を漏らすことない状況を鑑みると、発掘の為の人員、コロシアムについての知識、情報の隠匿など高度な知識や莫大な費用、人脈を前提にしなければならない。

そう、つまりはそれを賄えるだけの資産を持つ者であるということだ。

——流石に今回のことは腹に据えかねた

たとえ黒幕が貴族達や成金であろうと。

「今宵の夜会で全て引きずり出してさしあげましょう」

燃え散る青い炎が銀色の双眼に反射して暗い部屋のなか銀を青く浮かび上がらせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6468t/>

それいけ魔王さま！

2011年12月3日14時47分発行